



第一次サウード朝以前のアラビア半島における部族 社会の政治構造

中村, 覚

(Citation)

近代, 103:1*-70*

(Issue Date)

2010-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002611>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002611>



第一次サウード朝以前のアラビア半島における部族社会の政治構造

中 村 覚

- I はじめに
- II 遊牧部族社会の限界
- III 15世紀以降の定住民社会の拡大
- IV 定住民の政治社会構造の発展の限界
- V ワッハーブ主義発生の社会的背景
- VI まとめ

I はじめに

本稿は、『近代』100号と101号に掲載された拙稿の研究の続編となる。サウディアラビアの国家形成における遊牧民と定住民の政治的役割に関する問題設定と、国家形成の三段階の枠組みに依拠しつつ、第一次サウード朝が樹立される以前のナジュドの政治構造に関して検討するものである。先行研究では、第一次サウード朝が樹立される以前のナジュドの部族社会は、遊牧部族が興亡を繰り返す停滞した社会であったと見なす見解が有力であった。だが本稿での検討の結果、ワッハーブ主義の発生は、定住民社会の拡大が背景となっていたと見なす見解のほうが、より多くの史実に裏付けられると示されることとなる。

国家形成の要因について研究する立場から、本稿では、第一次サウード朝以

前の部族社会の政治・経済・社会構造について2つの観点から検討する。

第1に、中央政府を樹立せずに、分裂した社会を再生産した体制としての「部族社会」の政治経済構造について検討が加えられる。第2に、部族社会の「水面下」では、第一次サウード朝において中央政府の成立が可能となるような政治社会構造上の変化が静かに進行していたのではないのか、という仮説が検証される。

そこでIIでは、遊牧部族社会は、中央政府の樹立を導かない部族社会を再生産する政治社会構造となっていた点について明らかにされる。

IIIでは、定住民社会の拡大が15世紀以降に開始されたことを議論する。15世紀以来ナジュドでは、遊牧民の定住化や定住民による再定住化が始まることにより、遊牧部族とは異なる政治社会構造をもつ定住民の社会が拡大し始めていたことが示される。

IVでは、ナジュドの定住民社会の拡大に関して明らかにされるが、ワッハーブ主義の出現までは、定住民社会は、中央政府の樹立を導かない政治社会構造上の限界に直面していた点について検討する。一方では、第一次サウード朝において中央政府の成立が可能となるための社会的変化が着実に進行していたと指摘される。

Vでは、「シャイフ」の出現の背景について検討が行われる。定住民の社会が拡大する中でナジュドではウラマーが増加し、イスラームに関する学問の蓄積が行われていたことなどが明らかにされる。

本稿では、資料や先行研究の成果を以下のように活用した。先行研究において見られた「遊牧民史観」と「定住民史観」の問題は、適切な歴史的研究の方法の組み立てによって解きほぐされると考えられる。そこでまず、できるだけ歴史学の観点を重視して、18世紀中頃までの事象に関する年代記[عيسى 1966]や[الحنبلي 1974]、探検家の記録[Wallin 1979]、[Burckhardt 1992]などを史料として活用することとした。また、歴史的情報を収録したウラマー名鑑[البسام 1974]

を活用した。

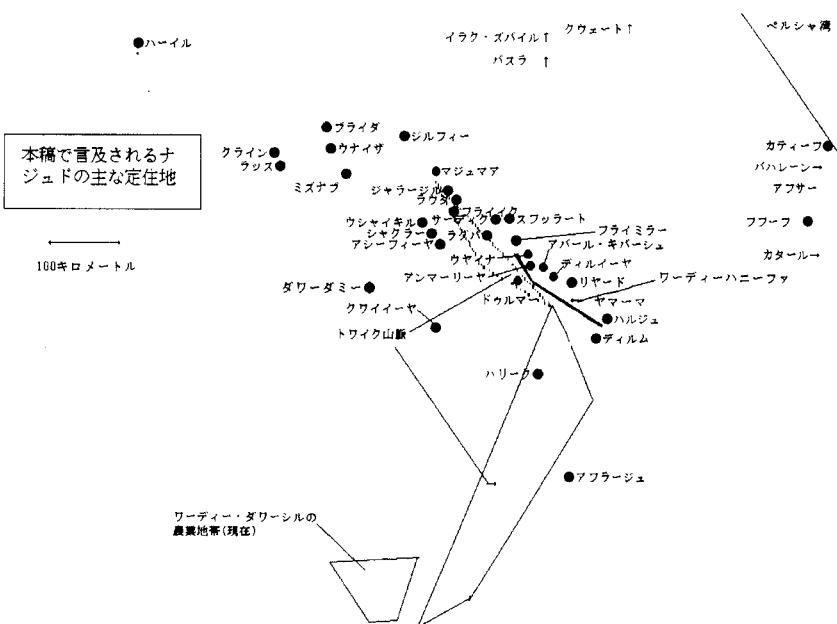
次に、本研究は、サウディアラビア人研究者が活用した全ての史料にはアクセスできなかった制約に直面したし、当研究の政治社会学的な目的には当面のところ十分な史料を得たので、二次的に資料的価値の高いものとして、18世紀までの歴史研究を活用するのは妥当であると判断した。[Juhany 2002=1983]、[الجزالين 1992]、[حربي 1994]、[السويداء 1993]、[Freih 1990]、[Dakhil 1998]などである。その際には、筆者に可能な限りで、年代記との整合性を確かめ、論争点として残る課題は明らかにしておいた。筆者が本稿の作業を通して得られた見解として、サウディアラビア人による歴史研究は、第一次サウード朝の発生以前のアラビア半島史について、世界最高水準にあると確信するに至った。

サウディアラビアの国家形成に関する先行研究に関しては、拙稿で論じたが[中村 2008]；[中村 2009]、第一サウード朝以前のアラビア半島に関して論ずる本稿との関連で特筆しておきたいのは、U・ジュハニー(Uwaidah al-Juhany)による博士論文[Juhany 1983]が、ナジュドの定住民に関する史料収集で閉塞状況を打破した点である。[Freih 1990]は、ジュハニーの研究を検証したうえで、定住化の過程や政治社会構造に関して、多くの議論を付け加えたものと位置づけられる。ジュハニーの博士論文は、2002年に出版された[Juhany 2002]が、内容には変更は見られない。

また、以上の資料や先行研究で明らかにできなかった部族や定住地社会の諸側面に関しては、20世紀の探検家である H・R・P・Dickson, J・H・St. B・Philby、A・Muil の旅行記や回想録によって補った。また、部族で使用されている諸概念に関しては、20世紀の人類学の研究成果である[コウル 1976]、[Lancaster 1981]、[الغامدي 1990]を活用して、理解を深めることとした。ただし、それらの人類学研究は、20世紀に調査された結果であるので、18世紀の概念との相違に留意しなければならなかった。18世紀にも見られたものと同じ名称の概念が20世紀に観察された際には、18世紀と同じ意味で使用されていた場合と、すでに意味が

少し変化してしまっていた場合が見られたが、前者の場合は人類学的な深い洞察から恩恵を受けた。さらに、分節システムに関する政治学的なモデル化である [Coleman 1976]について検討した。アラビア半島の部族集団が、強大な政治連合を結成しにくかった政治構造が論じられる。

部族の名前、定住した家の名前、地名に関しては、それぞれ、以下に拠った [الجاسر 1980]; [الجاسر 1988]; [عبدہ 1995]。



II 遊牧部族社会の限界

本節では、遊牧部族社会における富の蓄積、部族指導者の政治的権威や動員力について検討するが、それらが国家形成の契機をもたらさなかった政治経済構造について論じられる。

II-1 11世紀から18世紀における遊牧部族の割拠

ナジュドでは11世紀に定住民の支配が崩壊した後、遊牧部族による興亡が続き、18世紀にいたるまで統一された中央政府が樹立されなかった。第1項では、この歴史的過程について議論する。

第一次サウード朝が発生する以前のナジュドに関する史料は非常に限られているが、先行研究は、以下のように、11世紀以降に遊牧部族がアラビア半島を分割する社会状況が形成されたという見解でおおむね一致している。

イスラームの発生直前のナジュドは、ヤマーマ(اليَمَامَة)と呼ばれていたが、ジュハニーは、アラビア半島では、おそらくイエメンに次ぐ大規模な定住民の社会となっていたと言う [Juhany 2002: 54]。7世紀から8世紀、現在のリヤード(当時ハジュル(حجر)やハルジュ(الخرج: 当時のヒドラマ(خضرمَة)には、バヌー・ハニーファ族(بنو حنيفَة)が、ナジュドの最大の土着勢力となり、灌漑システムを利用した農耕社会を形成していたことが、当時の遺跡に関する研究から判明している。バヌー・ハニーファ族は、預言者ムハンマドに忠誠を表明したり、ウマイヤ朝やアッバース朝の支配も承認したが、それらへの反抗も繰り返していた [Juhany 2002: 39]; [Freih 1990: 35-41]。

また7世紀、ナジュド南部のアフラージュ(الأفلاج)では、定住民のバヌー・カアブ族(بنو كعب)によって、カナートを駆使した定住地や耕作地が形成される一方、イエメンからも交易人が往来する大規模なスークが開かれていたことが伝えら

れている [الجزالين 1992: 118-127]; [Juhany 2002: 40]⁽¹⁾。

9世紀から11世紀中頃までの間にヤマーマ地方に存在したウハイダリーヤ朝(الأخضرية)は、ザイド派であったが(アラウィー派という見方もある)、中世ナジュドでは最後の定住民の国家となったと考えられている。フライフは、10世紀後半～11世紀以降にウハイダリーヤ朝が崩壊したとみているが、その衰退の後では、ナジュドの定住民社会を遊牧部族の襲撃から防衛できる政権は、第一次サウード朝まで現れなかった。11世紀からナジュドでは、タイ族(الطيء)やアーミル・ビン・サアサア族(عالم بن صعصعة)などがナジュドを分割したが、遊牧部族が定住民に対して優位となる社会状況を迎えたのだと考えられている [Juhany 2002: 45-50]; [Freih 1990: 42-4]; [الجزالين 1992: 95]; [السويداء 1993: 117-120]。

13世紀になると、ヒジャーズ東部から、バヌー・ラーム族(بنو لام)がナジュドへ移住を開始した。バヌー・ラーム族は、アール=ムギーラ族(آل مغيرة)、アール=カシール族(آل كثير)、アール=ファドル族(آل فضل)に分裂しながら、16世紀までナジュドを制圧した。タイ族やアーミル・ビン・サアサア族は、新しい部族に敗れ、イラク、クウェート、バハレーン、シリア方面へ移住したり、ナジュドに定住した [Juhany 2002: 50-1]; [Freih 1990: 152-155]; [السويداء 1993: 173]。

第一次サウード朝が樹立される直前の18世紀前半のナジュドを割拠していた遊牧部族には、おおよそ15世紀にヒジャーズ東部で活発となった後、ナジュドへ移住してきたと見られるバヌー・ハーリド族(بنو خالد)、ザフィール族(ظفير)、アナザ族(العنزة)、ムタイル族(مطير)、ダワーシル族(الدواسر)があった。13世紀から16世紀頃までナジュドを分割していたアール=ムギーラ族、アール=カシール族、アール=ファドル族、ジイブ族(الذعب)は、敗戦を重ねて次第に弱体化することとなり、イラクやシリア方面に移住したり、ナジュドに定住したことが明らかにされている(III-1「遊牧部族の定住化」参照)。年代記などにはほとんど事例として書き残されないが、敗れた部族の一部は、部族名を変更した(II-4「遊牧部族社会での政治的構造の限界」参照)。

15 世紀にはザフィール族が、16 世紀から 18 世紀中頃には、アナザ族がナジュドで最強の軍事勢力となった。18 世紀の初め頃には、バヌー・ハーリド族が、ナジュドとアフサーの定住地を支配下においていた。18 世紀中頃になると、ムタイル族がアナザ族に勝利して、ナジュドで最強の勢力になるかという勢いを見せたが、すでに第一次サウード朝の時代となっており、遊牧部族の勢力拡大には歯止めがかけられ始めていた⁽²⁾。

16 世紀から 18 世紀にかけては、カフターン族、アジュマーン族、ウタイバ族などの遊牧部族が、ヒジャーズ東部やイエメン方面から、ナジュドやアフサーへと新たに移住を行った。それらの遊牧部族は、ザフィール族、アナザ族、バヌー・ハーリド族、ムタイル族、ダワーシル族などと並ぶ、ナジュドの有力な部族に数えられるようになった⁽³⁾。

15 世紀から第一次サウード朝の時代までの間、ヒジャーズ東部やイエメン方面から、新たな遊牧部族がナジュドに移住してきては、既に存在していた遊牧部族と戦いを繰り返して勝利した。敗れた古い遊牧部族は、イラクやシリアなどへ移住したり、ナジュドで定住したり、部族名を変更したので、やがてナジュドの年代記の中には現れなくなった。遊牧部族は、数世紀にわたってナジュドで覇者なき戦いを繰り返したのみで、ナジュドに政治的統一をもたらすような強大な遊牧部族は、遂に出現しなかった。

II-2 遊牧社会における富の分散

第 2 項では、中央政府を樹立することがなく、政治的な分裂状況を再生産した、ナジュドの遊牧部族社会の政治経済構造について検討する。遊牧部族は、支配階級や国家の形成を可能とするような、富や政治的権威の集中を可能とする政治経済構造をもっていなかったのだろうか。

遊牧民の親族構造は、砂漠の雨量が少ない気候で牧畜を営むには、適した構

造であった。なぜなら、「バイト(بيت)」と呼ばれる「世帯」を最小の単位として、季節や降雨や環境などの状況の変化に応じて柔軟に離散と集合を繰り返すことによって、希少な牧草地や井戸を利用することが可能となっていたからである[コウル 1975: 57, 67, 90-96, 100]。

遊牧民の主要な生産物は、動物から得られた乳、毛、毛皮、油、バターなどであった。これらの生産物は、自分たちで消費する分を除いた残りが市場で交易された。貧しい遊牧民の場合は、衣類、小麦、武器、ラクダや馬の鞍、わずかなばかりのコーヒーや煙草のような嗜好品などを買い、借金を返済すると残金はほとんどなくなる程度の生産高であったという⁽⁴⁾。

移動生活が可能な所持品しかもたない遊牧民にとって、産出された富を蓄積する形態は家畜の所有とならざるをえなかったが、家畜は、世帯が共同で所有するものとされていた [コウル 1975: 100-101]。また、井戸や放牧地は、部族で共同で管理され、使用されることになっており、それらの売買は最も忌避される行為とされていた[الغامدي 1990: 173-175]。これらのような家畜の所有形態、井戸や土地の使用形態は、蓄積された富を一部の人々に集中させないような働きがあった。遊牧民は、遊牧以外の形態の経済活動には、富を投資しにくい状況におかれていた。遊牧活動は、世帯の成員の全員に過酷な肉体労働を課すものだったため、遊牧とそれ以外の生産活動を同時に行うことは容易ではなかった[Nuaim 1987: 118-9]。

多くの家畜を所有する豊かな部族指導者(شيخ، شيوخ)が、大土地を所有し、自分たちは遊牧を継続する一方で、奴隷や黒人の小作人を雇って土地を耕作させていた事例が 20 世紀初頭のナジュド南部で確認されている[Philby 1922: vol.2: 13, 94]。場合によっては、自分は定住地に住む一方で、自分に代わって遊牧を行う労働者を雇い、牧畜をさせることがあった[Wallin 1979: 85]。だがそれらの利益は大きくなく、「豊かな遊牧民」も、「貧しい遊牧民」とほとんど同じような物質生活を営んでいたという[Burckhardt 1992: vol.1: 72-3]。

部族指導者は、部族民から税を徴収することはなかった。そこで部族指導者が入手できた「税」は、支配領域を通行する隊商から徴収する「フツワ税(خوة)」だった。定住民は、隊商の通行の際には、フツワを支払うだけではなく、ハウイー(خوي)やラフィーク(رفيق)と呼ばれる護衛を部族に依頼しなければならない慣習となっていた[Freih 1990: 238, 247, 250]。

また、遊牧民は、略奪によって富を獲得することもできた。しかし多くの場合、略奪された側からの反撃が開始されて、相互の略奪戦となってしまうので、略奪は富の蓄積手段としては限界が大きかったと言えよう。

部族指導者は、富を蓄積しない慣習があった。彼らが手にした所得は、部族民の間に分配されることが期待されており、実際にそうすることが多かったからである[Burckhardt 1992: vol.1: 118]。ランカスターは、20世紀のルワラ族の部族指導者について、「毎年、数万£を所得として得る部族指導者が、\$ 50の金に困って借金する」と述べている[Lancaster 1981: 97]。これは、19世紀初めにブルクハルトが記した部族指導者の姿と変わらないように見える。

このような気前のよい再分配によって部族指導者は、名声を高め、彼の地位や政治的權威を保っていたといえることができる。しかし、このような気前のよさのために、部族指導者は富を蓄積することができず、国家の支配に必要な、自由に命令できる強大な軍隊、行政機構、支配階層などを生み出す財政基盤をつくることはなかったと言えるだろう。

部族指導者の気前のよさと、首長制社会のアミール(امير)⁽⁵⁾の気前のよさの間には、明らかな相違がある。単なる部族指導者にすぎなかったラシード家が、19世紀に首長制社会のアミールへの発展を遂げた要因の1つには、財政収入の一部を民に再分配する一方で、自らの政治権力を強化するための財政規律に留意し、富の蓄積を進めたことが指摘されている [ブランド 1998: 257]。

遊牧部族は、経済的に平等な成員から構成される社会を再生産していた。遊牧という生産活動や遊牧部族の部族指導者の経済的な行為によっては、国家の

支配階級の形成を可能とするような富の集中は促進されなかった。

II-3 部族指導者の權威の分散

遊牧部族は、支配階級や国家を形成するために必要とされる、政治權力の集権化を可能とする政治構造をもっていなかったのだろうか。ここではナジュドにおける遊牧部族の指導者の政治的權威について検討する。

最高部族長(شيخ القبيلة)⁽⁶⁾は、それを輩出する家柄があり、そこから選出されていた。しかし、最高部族長の家柄から誰が次の最高部族長として選出されたのかについては、明確な継承システムはなかった。ある最高部族長が没したときには、最高部族長としての役割を遂行できる能力をもっている人物が選出されることが重要であり、最高部族長の家の男子なら、息子、叔父、従兄弟、兄弟などの誰から選ばれてもよかった。

最高部族長は、基本的には他の部族民と平等な地位にあり、絶対的な政治的權威をもつには程遠かったと指摘されている [Burckhardt 1992: vol.1: 116]。部族指導者の權威の範囲は、ランカスターによれば、強制力や、階層や職位などではなく、彼の「名声の範囲(reputation range)」によって決定されるという。最高部族長は、最も広い範囲で「名声」が届く指導者であると位置づけられている [Lancaster 1981: 81-85]。ある部族の政治的、軍事的な統一行動は、部族指導者の名声によって可能とされていたと言えるだろう⁽⁷⁾。J・L・ブルクハルトによれば、サウード家は、ベドウィンは強制によってではなく、雄弁な説得に従う性質があったことを見抜いていたので、砂漠の最も雄弁な詩人を集めて支配に利用したという [Burckhardt 1992: vol.1: 251]。

部族では有力な部族指導者の合意に基づく合議制によって政治的な決定が下されることになっており、部族指導者は独裁的な権限をもっていなかった。ブルクハルトの記述をまとめると、ベドウィン部族の「政府」とは、「多くの戦

士を擁する複数の家族」のことであると言えよう [Burckhardt 1992: vol.1: 116]。

部族指導者は、部族民に対して彼の意志を強制できるような軍事力をもっていなかったし、法的に彼の権限が定められていたのでもなかった。彼の名声や合議での説得力によって部族民を従わせることが可能になっていたのだとまとめられる。

最高部族長の最も重要な 5 つの役割は、戦争の指揮、平和や休戦の交渉、キャンプの設営、客のもてなし、部族民の間の仲裁などであった[Burckhardt 1992: vol.1: 117]。

部族における軍事的指揮は、必ずしも最高部族長によって行われるのではなく、アキード(عبد)と呼ばれる指揮官によって行われる場合があった[Burckhardt 1992: vol.1: 295-6]。しかし最高部族長にせよ、アキードにせよ、部族民の合意に基づかない決定を下したり、独断で軍事的命令を発することはできなかった。

アラビア半島のベドウィンの部族指導者が率いる戦士は、カウム(قوم)と呼ばれていた[Dickson 1936: 117]。ランカスターによると、カウムは、共通利益のために集合した人々であり、共にテントを設営する集団であるという[Lancaster 1981: 10]が、もはや戦争がなくなった 20 世紀後半でのカウム概念の理解だと考えられる。遊牧部族の指導者は、同一部族民であったからといって、自由に戦士を徴用できなかったし、まして常備兵などは保有していなかった[Dickson 1936: 344-345]。部族指導者は、彼の部族民の自発的な行動を喚起させるために、交渉力、判断力、情報をもつことによって部族民を動員することが可能となっていたという[Vidal 1976: 496-497]; [Lancaster 1981: 87, 93]。

最高部族長は、部族民から戦士を募らなければならなかったし、自由に指揮できる軍をもつための潤沢な資金ももっていなかった。このような理由により、最高部族長は、持続的な征服活動を行うための軍事力をもつことは不可能であったといえる。

それでは親族集団を基本単位とする「分節システム」は、政治的権力の集中

や強大な政治勢力の出現を可能としなかったのだろうか。

遊牧部族の「分節システム」における集合と離散では、ファフズ(فخذ)と呼ばれる集団が、最も核となる軍事的単位として重要だったことが指摘されている。ファフズは、血の復讐に関する責任を負う集団だったので、遊牧民が自分の安全と生存を確保する上で最も重要な集団だったからである。ファフズは、5 世代程度前の男性祖先を共通にもつ全ての子孫を含み、およそ 50 世帯から構成される集団であると説明されることが多い⁽⁸⁾。それぞれのファフズは、部族指導者によって率いられていた。

ファフズがいくつか集合すると、アシーラ(عشيرة)などと呼ばれる、おおよそ最大規模の軍事集団となる段階があった⁽⁹⁾。アシーラは、同一の名を冠するカビールより一段階下位の集団である。部族集団は、保有する放牧地(ميرة)の面積が広くなったり、部族民の数が多くなればなるほど、政治的には分離する傾向があった。英国が第一次世界大戦中に作成した部族リストによると、アラビア半島において広い放牧地をもっていた部族の全てが、2 つ以上の政治集団に分かれていた。

シャンマル族を例にとると、シャンマル族はイラク方面のシャンマル族とハーイル方面のシャンマル族に分かれており、両者の間には、日常的に共同して遂行される政治行動は存在しなかった [Oleander Press 1986: 132-136]。ハーイル方面のシャンマル族は、アブダ族(عبد)、アスラム族(الاسلم)、シンジャーラ族(سنجارية)などの実質的に政治的な最大単位となる集団に分かれていた。ハルブ族やウタイバ族のように東西に長い領地を持つ部族は、ヒジャーズ側とナジュド側で地理的にかつ政治的に独立した集団に分かれていた [Oleander Press 1986: 123-127]。

まとめると、アラビア半島の部族では、部族指導者は、彼のファフズの長であったが、彼が政治的影響力を行使できる範囲は、名声の範囲によって決定されていた。それはおよそアシーラとよばれる集団が限界となっていた。ただし、

軍事指揮官には部族指導者ではないアキードが着任することがあり、戦士集団は地縁とも系譜とも関係がないカウムであったように、系譜や地理的区分に基づくと想定される古典的な分節システムとは異なる原理が、実際の軍事的活動を支えていたと言えるだろう。

II-4 遊牧部族社会での政治的提携の限界

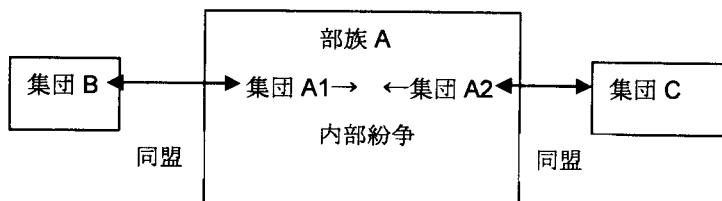
部族的なイデオロギーは、敵からの攻撃に直面したときには、互いに助け合うべきであるという部族的団結を強調する価値観を内包している。しかし現実の部族が、部族内部の紛争に直面したときには、統一され、協調した政治的な行動をとることは容易なことでも、必然的な結果でもなかった。

アラビア半島の部族は、紛争において団結するよりも分裂することがよくみられるが、R・コールマンはこのメカニズムを研究した。コールマンは、1つの部族が、他の部族を巻き込んで紛争をエスカレートさせる仕組みを「内部分節化(*Internal segmentation*)」という概念で説明した。

「内部分節化」とは、ある1つの部族Aの中で発生した政治的対立は、紛争当事者であるA1とA2の間で争われただけではなく、A1が、別な部族Bと政治的同盟を結ぶことによって、A2に対して優位に立とうとする政治的行動である。また、同様に、A2がA1に対して優位に立つために、別な部族Cと同盟することもありえる[Coleman 1976: 443-447]。

アラビア半島では、エバンス=プリチャードが議論したような、紛争に直面した部族が部族の政治的統合を「自動的に」回復する仕組みとしての「分節システム」が常に機能していたのではなかったと言えるだろう。

図 内部分節化



コールマンによれば、メッカのシャリーフは、アラブの反乱に部族を動員しようとしたが、シャリーフと部族は、支配者が家臣を「招集する」というような関係ではなかった。シャリーフは、対等な立場で部族と「交渉」し、動員を「勝ち取らなければ」ならなかった[Coleman 1976: 59-62]。

また、コウルは、部族における政治的関係の形成は、常に父系親族体系に基づくとはいえず、公式には表明されない、母系的要素や婚姻を通じたつながりも大きな影響を与えていると指摘している[コウル 1975: 148-9]。内部分節化は、部族政治における部族内部の分裂と、他の部族との提携の構図を明快にモデル化している。

部族間の関係に関しては、19 世紀に、G・A・ウォーリンが指摘していた。彼によれば、異なる 2 つの部族の間には、3 種類の関係がみられたという。1 つ目は、どちらかが一方に税金を支払うわけではないのに、互いに出自のよさが対等な立場にあるという条件で、互いを防衛し合い、敵には協力して戦うような同胞関係にある場合である。2 つ目は、互いに攻撃をし合わないという点で友好関係であるが、一方が第三者から攻撃を受けても、防衛に協力はしないという関係である。3 つ目は、敵対関係にある場合であるという[Wallin 1979: 8]。

アラビア半島の部族における政治的統一や協調的な軍事活動は、団結を強調する部族イデオロギーや、父系親族体系あるいは地域的分節によって成立するような分節システムにもとづいて「自動的に」達成されるようなものではなかったと言えるだろう。現実の部族集団が協調行動をとるのか否かは、おかれた政治的状況や、互いの過去の関係などに基づいて決定されていたと考えられる。

遊牧部族が、部族名を変更して、他の部族との連合を形成するということがあった。「ヒルフ(خلف)」とは、勢力の小さな部族集団が、より大きい部族集団に吸収され、所属と部族名を変更する方法である[Freih 1990: 238, 281, fn.158]。これは記録に残されにくいものであるが、事例としては、16 世紀から 17 世紀頃、バヌー・タミーム族のウライナート族が、勢力を伸ばしつつあった諸部族に対して劣勢となったので、バヌー・タミーム族という名を放棄して、当時多勢であったスパイウ族に所属を変更したことがある[البسام 1974: 233]; [الجبس 1981: 538]。

対等な部族集団同士が連合して名称を変更した事例では、バヌー・カビール族(بنو كبير)の例があげられる。バヌー・カビール族は、バヌー・ワーリブ族(بنو والبه)とシャクル族(شكر) という 2 つの部族が対等に連合したときに「カビール部族連合(قبائل كبير)」という名称をもつ 1 つの新しい部族集団として成立したものであった[الغامدي 1990: 79]。

その他に、同一の先祖を共有していない部族集団が新しい部族を形成した事例としてアラブ部族の事典や年代記に基づいて確認できるものには、ザフィール族、バヌー・ラーム族、ダワーシル族、バヌー・ハーリド族などをあげることができる[Freih 1990: 239]。

また、最高部族長が、もともと他の部族の出身である場合もある。ムンタフィク族(المنتفق)の最高部族長は、シャリーフ家の出身だった。また、ムタイル族のダウィーシュ家(النويش)は、もともとハルブ族(حرب)の出身だったという説がある[Freih 1990: 231]。

このような「名称や帰属の変更」によって複数の部族集団が新しい一つの部族となった場合でも、それが部族社会の分裂を統合する契機となったわけではなかった。このような方法によって形成された新しい「部族」は、既に論じた政治社会構造的な限界をもつ部族に他ならなかった。

屈強な部族は、定住民や弱い部族からフツワ税を受け取った。フツワ税は、しばしば「保護税(protection tax)」と訳される。フツワ税を支払う部族集団と受け取る部族集団は、「同胞(アフ)

同胞)」関係にあると表象された。フツワ税を支払う者は、その代償として、敵からの攻撃を受けたときには、フツワ税を徴収する者によって防衛される権利をもつことになっていた。また、フツワ税を支払う集団と受け取る集団の間で紛争が発生した場合には、「血の代償」なしで解決する関係となった[Musil 1928b: 60]。フツワ税による「同胞」の形成は、さらに別稿で言及したいが、ラシード朝(امارة الرشيد)のような首長制社会をもたらすのが限界であり、国家を形成する要因にはならなかった。

以上にとりあげた、「部族名を変更することによって成立する部族連合」もフツワ税による庇護関係のどちらも、複数の有力な部族同士が、互いに領地を囲い込みながら紛争を繰り返すというナジュドの政治構造を克服する方法とはならなかった。

「部族社会」の政治的分裂は、以上にあげてきたような部族社会の政治構造だけではなく、部族アイデンティティー、部族慣習法、部族や地域の方言などによって文化的にも再生産されていた、ということができるだろう。

遊牧部族は、集合と離散を繰り返す、擬制の親族集団を基盤とした社会であった。部族指導者の影響力の範囲は、彼の「名声の範囲」によって決定されていたが、アシーラと呼ばれる段階の集団が最大の政治集団となっていた。部族指導者は、独自の軍、行政機構、財源を有しておらず、彼の政治的意向が他の部族民に受け入れられるか否かは、合議での彼の説得力にかかっていたと言えるだろう。

遊牧部族は、敵からの攻撃に直面したときには団結して防衛するという価値観をもっていた。だが内部に紛争が発生すると、内部分節化の働きにより、周辺の部族などを巻き込みながら、分裂することがみられた。かといって部族同士の連合は、地域の覇権となるような強大な勢力をつくりだすことがなかった。以上のような遊牧部族の政治社会構造は、政治的な拡張に限界を生み出しており、中央政府が形成されることもなかったのだと考えられる。

II-5 遊牧部族による定住民の支配

本項では、遊牧部族と定住民の関係について議論を行う。第一次サウード朝が樹立される以前、ナジュドでは、遊牧部族は定住民に対して政治的にも軍事的にも優位な立場にあった。部族社会における遊牧部族と定住民の関係は、中央政府の形成を可能とする状況を生み出さなかったのだろうか。

遊牧民と定住民の関係には、3つのタイプをあげることができるだろう。第1には、政治的友好関係に裏付けられた、市場を通じた経済的交換関係である。第2には、フツワ税の支払いを通じて成立していた庇護関係である。第3には、部族民が農地を所有して、賃労働者や奴隷などの定住民に小作をさせる場合である。

だが既に論じたように、遊牧部族は、以上の3つのいずれの方法によって収入を得ても、部族指導者が行う特有の再分配の様式のため、強大な政治権力の成立を導くような富の蓄積は行われなかった。

遊牧民は、雨量に応じて自発的に、定住化して農耕を開始したり、羊や山羊などを牧畜する半遊牧民となるなど、生活形態を変更することがあった。ナジュドでは半遊牧民は、シャーミーヤ(شامية)と呼ばれた。半遊牧民は定住地をもつが、春の3ヶ月程度のみを遊牧生活に費やした。半遊牧民は、遊牧民と定住民の中間的な存在であった。

遊牧部族と定住民のどちらの側も、市場を通じた他方との商品交換を必要と
していた。とはいえ、遊牧部族の定住化が進んだ場合には、定住地の生産性が
向上し、両者の交換関係は、より活発となる傾向があったようである。

19世紀に定住化したバヌー・ウクバ(原著では Ban' Ukba: بنو عقة)の定住化の
事例では、定住化した遊牧民は、農耕民から畑作の方法、地域の方言、その他
の生活の方法を学び始め、次第に以前からの定住民との区別がつかなくなった
という [Wallin 1979: 17]。

また、新しい定住民が定住地の人口を増加させたことにより、新しい需要が
生み出され始めた。だが遊牧民は、手工業に従事することを嫌う価値観をもっ
ていたので、新しい定住地には、職人を迎え入れたという [Wallin 1979: 85]。

19世紀のマアーン(معان)周辺における遊牧民の定住化の事例では、定住地は、
人口が増えると、次第に遊牧部族による攻撃を撃退するようになった。定住民
の人口が増加し、安全が保障される状況が実現されると、定住民と遊牧民の間
の経済取り引きが活発になったという。遊牧民は、服、火薬、武器、スパイス、
コーヒー、砂糖などを求め、定住民は、ラクダ、羊、ウール、バター、ミルク
を求めた。バーター交換による取り引きであっても交易が行われれば、遊牧民
と定住民の関係は、ますます友好的になる傾向があったという [Wallin 1979: 9]。

また、遊牧民と定住民の緊密な政治的関係が、支配の安定化をもたらした一
つの要因となった事例として、ラシード朝をあげることができるだろう。ラシ
ード朝の支配一族ラシード家は、シャンマル族の定住民であった。このため、
ラシード家の支配領域では、定住化したシャンマル族と、遊牧を継続したシャ
ンマル族の間の関係が緊密となり、両者の間の市場での取り引きが行われた。
一方でラシード家は、遊牧部族からの徴税を強化したが、これらは、ラシード
家の税収を増やし、財政基盤を強化することになったという [Wallin 1979: 65-6]。

以上の事例からは、半遊牧生活や定住生活を始める遊牧民が継続的に増加す
れば、地域の治安が安定化し、農業生産が向上し、商業活動が活発となる傾向

があったことを示していると言えるだろう。遊牧民の定住化は、遊牧社会に根本的な変革を促す可能性を孕んでいた。19世紀のラシード朝の事例では、定住民と遊牧民の緊密な関係が、部族社会を首長制社会に変化させた要因の一つに数えられた。遊牧民が、半遊牧生活を始めたり、定住化したベドウィンが再び遊牧生活に戻ることは、頻繁にみられた現象でもあったとしても、次節以降で論じられるように、15世紀以降のナジュドでは定住化が持続的で揺るぎない社会変化のベクトルとなった。

本節のまとめを行うことにする。遊牧部族は、一定の領域に軍事的権威を確立していた。しかし遊牧部族は、政治権力の集権化や富の集中を生みださない政治経済構造を再生産していた。また、遊牧部族の分節システムは、遊牧を営むためには適した親族形態であり、一定の軍事的な協力関係を生み出したが、内部分節化など、政治的な協調行動を困難とする特性をもっていた。ナジュドの部族社会には、部族的な敵対関係を乗り越えるような政治的連合をつくり出す契機も充分にはなかった。遊牧部族の定住化は、遊牧社会を変革する可能性を孕んでいたが、15世紀までのナジュドでは一時的な活動でしかなかった。遊牧部族社会は、中央政府の樹立を可能としない政治経済構造を再生産し続けていたと言えるだろう。

III 15世紀以降の定住民社会の拡大

11世紀以来、アラビア半島で定住民社会に対して優位に立った遊牧民社会は、中央政府を形成しない政治構造を再生産していたとしても、ワッハーブ主義と第一次サウード朝が18世紀に開始される以前には、それを促すような変革が静かに進行していたとも言える。

18世紀に「シャイフ」が、定住地を舞台として伝道活動を開始していたことは着目に値するだろう。「シャイフ」の生地ウヤイナ(العينة)、彼が初めて本格的

な伝道活動を開始したフライミラー(حريملاء)、彼を受け入れたサウード家のディルイーヤなどは、全てナジュドの定住地だった。ワッハーブ主義や第一次サウード朝の開始は、ナジュドにおける定住地の増加が社会的な背景となったのではないかと考えることができる。

ではナジュドの定住地は、いつ頃からどのように形成されたのか。また、その政治社会構造は、いかなるものだったのか。遊牧部族のように、政治的分裂を再生産するような構造をもっていたのか。

ナジュドでは、15世紀以降、2種類の定住化が進行していた。1種類目は遊牧部族民による定住化である。自発的に遊牧生活を放棄して新しい定住地を建設したり、既にある定住地へ移住した遊牧民が現れた。2種類目は、定住民がその定住地を出て、他の定住地へ移住したり、新しい定住地を建設するパターンだった。

そこで本節では、第1項で遊牧部族の定住化のパターン、第二項で定住民による再定住化のパターンについて検討する。また、第三項では、定住地の政治社会構造について検討する。

III-1 遊牧部族の定住化

本項では、遊牧民による定住化の事例についてとりあげていく。

(a) バヌー・ワイル族:「人口増加」と「部族混合」

ウシャイキル(أشقر)は、バヌー・タミーム族のウハバ族(الوهبة)が、11世紀以来住んでいた定住地であった[Freih 1990: 100]。だが16世紀以降、アナザ族のバヌー・ワイル族(بنو وائل)の遊牧民が、ウシャイキルに移住を開始した。この結果、定住地の人口が増加し始めた。

その後、バヌー・ワーイル族のムドリジュ・ビン・フサイン・ワーイリー (ملج بن حسين الوائلي)が率いる一族は、ウシャイキルを去り、スダイル(سدير)地区のトワイム(التويم)へ移住し、定住地を建設した。

さらにトワイムから、2つの定住地へ移住が行われた。バヌー・ワーイル族のイブラーヒム・ビン・フサイン・ビン・ムドリジュ(إبراهيم بن حسين بن ملج)がトワイムを去り、ハルマ(حرمة)を建設した。かつてハルマには、アーイズ族(عائد)が住んでいたことがあったが、すでに放棄されており、ムドリジュ族が再建し始めたのである。

また、フサイン・ビン・ムドリジュ・ビン・フサイン(حسين بن ملج بن حسين)が支配していた頃のトワイムに住んでいたアブドッラー・シャンマリー・アール=ミーバール(عبد الله الشمري آل ميلال)は、シャンマル族のアブダ族に属していたが、トワイムを去り、マジュマア(المجمعة)を建設した[بن عيسى 1966: 28-32]; [Freih 1990: 100-102]。

これらの移住の年は、年代記によると14世紀から15世紀に行われたとされている。ウシャイキルからトワイムへの移住はおよそ1300年、トワイムからハルマへの移住はおよそ1368年、トワイムからマジュマアへの移住は1417/8年と記されている[بن عيسى 1966: 28-32]; [Juhany 2002: 76-7]。

しかし、バヌー・ワーイル族の系図を検討したジュハニーは、トワイム、ハルマ、マジュマアへの移住は、いずれも16世紀から17世紀に行なわれたものであろうと結論している。トワイムへの移住を行ったムドリジュ・ビン・フサインから7代目の子孫は、1768年に死亡した。一世代を約30年と仮定すると、7世代前は、1550年頃なのではないかという推測が可能である。ウシャイキルからトワイムへの移住は、年代記では1300年とされていたが、系図をもとにした推測では、その250年ほど後だったのではないかと考えられることになる。ジュハニーは、定住の年が書き換えられた理由として、年代記を書き残したのはバヌー・ワーイル族の子孫であり、土地紛争で有利な証拠とするために定住の年

を200年程度早めに設定したのではないかと推測している[Juhany 2002: 77-81]。ジュハニーの推測は、1世代を平均30年と仮定したが、もしも20年とするなら、バヌー・ワイル族は約320年を書き換えたことになる。いずれにせよ、系図をもとにしたジュハニーの推測は、おおむね妥当であると考えられる。

また、年代記によれば、1635/6年、トワイムから3つ目の移住が行われていた。トワイムに住んでいたアール=アブー・ラッバーウ家(ال أبو رباح)は、フライミラーへ移住した。アール=アブー・ラッバーウは、トワイムの支配者だったアール=ムドリジュとの間に紛争が起きたため、フライミラーをウヤイナの支配者だったアール=ムアンマル家から購入して、定住したのだった[بن عيسى 1966:52-3]。

以上の過程についてまとめると、遊牧生活を営んでいたバヌー・ワイル族が、ウシャイキルに定住し、さらにそこからトワイムへ再定住が行われた。トワイムのムドリジュ家は分裂し、ハルマとフライミラーへの再移住が行われた。マジュマアには、シャンマル族の後発移住者が再移住したようである。ハルマとマジュマアは、全く新しい定住地であったが、フライミラーは、先に住んでいた住民から土地を購入した後で定住が行われた。

年代記の中では、遊牧民による定住や定住民による再定住の事例は数多く書き残されているが、それらの1つ1つの理由については必ずしも説明されていない。しばしばみられる説明は、部族や定住民との「意見の相違(الاختلاف)」のためとか、「土地を求めた」などの簡単な理由である。15世紀以降に頻繁になり始めた遊牧民による定住や定住民による再定住は、人口の増加の結果引き起こされる過密や資源の不足、部族間の紛争などが契機となったと見られる[Juhany 2002: 75]; [Freih 1990: 95-6]し、そのような個別の事例がある。

より巨視的な観点として、ジュハニーは、15世紀から18世紀の初め頃までの間に年代記に現れた、旱魃の年の数と雨量が豊富であった年の数を数え、天候上の要因を探った。ジュハニーが作成したリストによると、1446/7年から1737/8年までの290年間に、旱魃の年は14回で、雨量が豊富な年は36回だっ

た。ジュハニーは、天災や飢饉に関してもリストしているが、15 世紀から 18 世紀の初めの期間は、旱魃の年よりも、雨量が豊富な年の方が多かったと見ている[Juhany 2002: 56-62]。15 世紀から始められたナジュドの定住化は、比較的豊富な雨量に支えられていたと考えられる。

バヌー・ワーイル族がウシャイキルからトワイムへ移住した事例は、その理由が年代記に詳しく書き残されている。年代記の筆者であるビン・イーサーによると、ウシャイキルにバヌー・ワーイル族が増加し始め、農耕地を開拓して勢力を拡大した結果、以前から住んでいた住民は、将来それらのバヌー・ワーイル族との間に紛争が起きることを懸念し、ウシャイキルを出るように仕向けたという[عيسى 1966: 29]。バヌー・ワーイル族は、紛争を予め回避した事例ではあるが、人口増による過密が新たな再定住を引き起こすという仮説を裏付けている。

ナジュドの定住地では、支配者と同じ部族の住民は「隣人(ジーラーン حيران)」と呼ばれた[Juhany 2002: 98]が、ジーラーンとは、単に、後から定住地に移住してくる人々のことも意味した[Freih 1990: 193]ようである。年代記でのジーラーンの増加の様子からは、単に定住地の人口を増やしただけではなく、異なる部族が隣接して一つの定住地を形成する「部族混合」を促した現象だったと言える。「部族混合」は、紛争の原因となることもあったが、遊牧民とは決定的に異なる発展の様式だったと言える。

バヌー・ワーイル族の事例では、バヌー・タミーム族の定住地ウシャイキルにアナザ族のバヌー・ワーイル族が定住を行った。また、ハルマは、もともとアイズ族が住んでいた定住地だった。トワイムからマジュマアへ移住したのは、シャンマル族の住民アブドッラー・シャンマリ・アール=ミーバールだったが、このことからトワイムにはバヌー・ワーイル族以外の住民がジーラーンとして定住していたことが窺われる。

ただし、移住による人口増は紛争の契機ともなっていたのであるから、ジー

ランによる部族混合が、必ずしも平和的に定住地を拡大したのではなく、新たな部族紛争の火種を多分に孕んでいたといえることができる。

次項や第4節でも論ずるが、ウシャイキルやウヤイナは、10世紀以来、多くのウラマーを輩出した定住地であった。また、ハルマ、マジュマア、フライミラーは、その後さらに成長し、18世紀から20世紀には地域で中心的な定住地へと発展している。また、ウヤイナは、「シャイフ」が生まれた定住地となった。

古い定住地からの再定住

ウシャイキル→ (16C)トワイム→ (17C)ハルマ

→ (17C) マジュマア

→ (1635年) フライミラー

(b) ダワーシル族：「17世紀以降の定住化」

ダワーシル族がナジュドに出現していたのが確認できるのは、15世紀中頃である[السويداء 1993:167]; [حربي 1994: 20]。ダワーシル族は、ナジュド南部から侵入したが、17世紀頃に本格的に北上を開始し、ハルジュや、リヤードの北側の地域で部族紛争に巻き込まれ始めた[حربي 1994: 253-256]; [Juhany 2002: 68, 83]。ジュハニーは、18世紀のダワーシル族が遊牧を営んでいたというブルクハルトを引用する[Juhany 2002: 84]。しかし、20世紀初めになると、ほとんどのダワーシル族は、スダイルやワーディー・ダワーシルで、定住したり、大土地所有者となったり、半遊牧をしているという記録が現れる[Oleander Press

1986: 131, 328-329]。

ダワーシル族によるアフラージュやスダイルへの定住の全てについて正確な年を年代記から確認することはできないが、いくつかの手がかりから、定住が行われたおおよその時期が推定されている。

アフラージュにいたウトゥーブ族(العتوب)は、ダワーシル族との紛争に巻き込まれたため、ペルシャ湾岸方面への移住を開始して、18世紀初めにクウェート、カタール、バハレーンに移住し、それぞれの地域で支配者になったと言われている。クウェートのサバーハ家(الصاباح)、カタールのアール＝サーニー家(ال ثاني)、バハレーンのアール＝ハリーフ家(ال خليفة)である。ジュハニーは、この経過を逆算して、ダワーシル族は17世紀中頃までにアフラージュに定住を開始し、18世紀初め頃に先住民との紛争に巻き込まれ始めたのではないかと推測している。ただし、ジュハニーは、17世紀以前のアフラージュにはそれほど多くの定住民がいたことが確認されていないと言う[Juhany 2002: 85]。アフラージュに関する研究では、15～16世紀の前に定住者はほとんど確認されない[الجزالين 1992: 138]ので、ダワーシル族による定住は、アフラージュでの初めての大規模な再定住となったと考えられる。

また、ダワーシル族は、リヤードの北方地域にも定住した。年代記には、ダワーシル族が、1606/7年にビール(البيـر)をスパイウ族から奪い取ったり、1668/9年にサーディク(السدق)を建設したことが記されている[بن عيسى 1966: 50, 62]。

ジャラージル(الجلال)への定住は1667/8年より早かったと考えられる。ジャラージルの長だったダワーシル族のジャラージル・ビン・イブラーヒームが、1667/8年にスパイウ族に殺害されたことが年代記に書き残されている[بن عيسى 1966: 61]; [Juhany 2002: 86]からである。ジャラージル家のムハンマド・ビン・アブドッラーは、第二次サウード朝のハーリド・ビン・サウードの時代にアフラージュの知事に任命された。

また、ダワーシル族のスライマーン・スダイリーは、ガート(الغاط)をバヌー・

タミーム族から購入して定住したが、この定住の時期についてジュハニーは、同世代の詩人が活躍した時期を手がかりとして、17 世紀末頃と推測している [Juhany 2002: 86]。

また、ダワーシル族は、スフッラート(الصفرات)、アウダ(العودة)、シマース(الشماس)にも 17 世紀に定住化し、それぞれで支配者となった [Juhany 2002: 86]。

ダワーシル族による定住は、17 世紀の全ての期間にわたり、アフラージュやリヤード北方で進行したと見られる。定住化が進行していたダワーシル族は、第一次サウード朝から第三次サウード朝の時代を通じて、定住民の支配者であるサウード家に忠誠を誓っていた。

遊牧部族の定住

ダワーシル族 → (17C) ワーディー・ダワーシル
アフラージュ

- 1606/7 年 ビール
- 1668 年 サードイク
- 1667 年以前 ジャラージル
- 17 世紀 スフッラート、
アウダ、シマース
- 17 世紀末 ガート

(c) スバイウ族：「16 世紀の移住」

アラビア半島南西部から移住を開始したスバイウ族(سبيع)は、15 世紀の中頃に

は既にナジウドに存在していた[الطيب 1997: vol.5: 93-94]。17 世紀初めには、新たに定住を開始したダワーシル族とミフマルで定住地の支配者となったスパイウ族が紛争を起していることが書き残されているので、スパイウ族は 16 世紀には定住化を開始していたと考えられる。また、スパイウ族は、リヤードの南側にも定住を行った。

ビールに住んでいたスパイウ族のウライナート族(العريئات)は、1606/7 年ダワーシル族によって追放されたと記されている[بن عيسى 1966:50, 62]。アッターール(الطائر)の支配者となっていたウライナート族は、1667/8 年ダワーシル族出身のスタイルの支配者(アミール)を殺害したことが書き残されているので[بن عيسى 1966: 61]、アッターールへの移住は 1667/8 年以前に行われていたといえる。ラグバ(رغبة)には、諸説があるものの、1668 年から 1670 年の間にウライナート族が定住したと記されているが、一方では、16 世紀には裁判官がおかれていたという記録がある[آل الفليح 1997/8: 17-18]。ウライナート族によるビール、アッターール、ラグバへの定住は、ダワーシル族との攻防が見られ、また、裁判官が見られたラグバのように比較的安定した事例も見られた。

ウライナート族は、ミフマルで 16 世紀には定住を開始して、17 世紀にさらに定住化が進行したと考えることができる。ウライニー家(العريني)は、イマーム・アブドゥルアズィーズ時代のスタイルの裁判官やイマーム・アブドッラー時代のハルジュの裁判官に任命されるウラマーを輩出した。また、スパイウ族は、ダワーシル族などと並び、第一次サ우드朝から第三次サ우드朝まで、サ우드家に忠誠を誓い続けた部族の一つに数えられる。

ブカイリーヤ(البكيرية)は、ウナイザ(عنيزة)の住民ブカイリー家(البكري)から井戸を購入したウライナート族のウスマーン家(العثمان)によって開墾されたことをきっかけに、井戸を増やし、農地が拡大したことによって発展した。フライフは、ブカイリーが土地を売却した年が 1766/7 年だったと指摘しているが、A・パッサムは年代を特定していない[Freih 1990: 122-123]; [البسام 1974: 934-935,

fn.1]。

(d) アーイズ族とジイブ族：「17 世紀に定住し、放牧地を喪失」

アーイズ族やジイブ族は、16 世紀頃にナジュドで屈強な部族に数えられたが、17 世紀から 18 世紀になると年代記に登場しなくなった。その一部は、ナジュドの外へ移住したのであるが、ナジュドに定住したものも多かったと考えられている。

アーイズ族は、15 世紀から 17 世紀の間、ナジュド南部の放牧地を主な戦場として戦闘を繰り返していたことが書き残されている。だがアーイズ族は、ダワーシル族に対して劣勢となり、ダワーシル族のライバルであるカフターン族に庇護を求めた。アーイズ族が遊牧民として記録に現れた最後は 17 世紀の終わりであった[السويداء 1993:167]; [حربي 1994: 46, 47, 129]。

遊牧民としては年代記から姿を消したアーイズ族だが、その子孫は、ナジュド南部の定住地、ハルジュやディラムの支配者となっていた。アール=ウスマーン家(العثمان)はハルジュの支配者だったようである[بن عيسى 1966: 73]。その後裔のアール=ザーミル家(ال زامل)はディラム(نلم)の支配者[الحقيل 1994: 214]、同じく末裔のアール=ウファイサーン家(الغيفسان)はハルジュのサラミーヤ(السلمية)の支配者となった。年代記では、これらの支配者が 17 世紀に戦闘に巻き込まれていたことが記されているので[Juhany 2002: 87]、定住化は 17 世紀か、それ以前の 16 世紀に行われたのだと考えられる。アーイズ族は、ハルジュ周辺に多くが定住した[الحقيل 1994: 214-5]。後に、アール=ウファイサーン家は、サウード家の家臣となった。第一次サウード朝ではハルジュの知事やアフサーの知事、第三次サウード朝ではアシールの知事に任命されている。

ジイブ族は、15 世紀中頃にナジュドに登場し、16 世紀には当時最強だったアナザ族と戦闘を繰り返したが、17 世紀中頃にカフターン族やダワーシル族に

敗れたことが書き残されている。ジイブ族は、18 世紀になると年代記にほとんど登場しなくなった[حربي 1994: 27, 68, 69, 109, 139, 146]。

17 世紀頃から、ジイブ族は、アラビア湾岸方面やイラク方面への移住を行った。18 世紀になってもナジュドで遊牧していたジイブ族がいたことも年代記に書かれているが、ジイブ族の放牧地は明確には伝えられていない[Juhany 2002: 73]。おそらくナジュドでのジイブ族の定住は、17 世紀頃に行われたのであろうと考えられる。ジイブ族は、ナジュドやアフサーで分散して定住した。その一部は、サ우드家とも姻戚関係を結んでいる[الطيب 1997: vol.1: 483, 487]。

アーイズ族やジイブ族は、16 世紀から 17 世紀にナジュドで敗れた部族である。どちらもナジュドの外へ移住したり、ナジュドで定住化して、領地や放牧地を完全に喪失し、部族は一体性を喪失して拡散した。アーイズ族の一部は地方の支配者として地位を確立した。ジイブ族は、サ우드家と姻戚関係に入ったものもいたが、分散して定住化したと考えられる。

(e) バヌー・ラーム族 (アール=ファドル族、アール=ムギーラ族、アール=カシル族) : 「16 世紀以降に定住、部族は分散」

バヌー・ラーム族の 3 つの部族、アール=ファドル族、アール=ムギーラ族、アール=カシル族は、13 世紀から 16 世紀にかけてナジュドで勢力を分け合った三大遊牧部族だった。しかし 15 世紀に出現したザフィール族、アナザ族、ムタイル族などに敗退を重ね、ナジュドの牧草地を喪失し、17 世紀をほぼ最後として年代記には登場しなくなった。これらの 3 つの部族は、遊牧部族としては消え去り、特に有力な地方の支配者としてもナジュドには残らなかったようである。アール=カシル族の一部は、ヒルフにより、他の部族に所属を変更したと伝えられている[البسام 1974: 823]。

アール=ファドル族は、18 世紀前半に、バヌー・ハーリド族やウタイバ族に

敗れた後は、年代記に登場しなくなった[حربي 1994: 286-9]。アール・ムギーラ族は、16 世紀前半は優勢だったものの、同後半になると敗戦が続き、17 世紀後半を最後に年代記に現れなくなったようである[حربي 1994: 299-301]。大半のアール=ファドル族は、17 世紀からイラクなどへの移住を開始し、ナジュドに残ったのは、僅かであったという。アール=ファドル族やアール=ムギーラ族は、ナジュドやアフサーに分散して定住した[الحقيل 1994: 212- 213]; [البسام 1974: 438, 822-823]。

ナジュドの遊牧民による定住化は、15 世紀から開始されたが、17 世紀になって加速した。新たな定住地が建設され、人口は増加した。さらに定住地が過密となったり、紛争に巻き込まれたことを契機に、他の土地への再定住が行われていた。遊牧部族は、定住した際には、部族集団の政治的統合性から次第に離れることになったと考えられる。また、定住化や再定住化の過程で、部族混合が進められることになった。

遊牧民が定住して建設したことにより拡大した定住地の中には、ナジュドの各地で中心的な定住地に発展するものや、「シャイフ」が活動を開始したフライミラーなどがあった。また、定住した遊牧民の子孫の中からは、半遊牧を営む者や大土地所有者になったもの、スパイウ族やアーイズ族のように定住地の支配者になる家、ジウブ族のようにサ우드家と姻戚関係を結ぶ家などが現れた。

III- (2) 定住民による移住と再定住

ナジュドの定住地は、遊牧民による定住化だけではなく、もともと定住民だった住民が、既存の定住地から新たな土地へ移住して、定住地を建設したり、他の部族との部族混合が進む中で増加した。また、古くから存在していた定住地が、15 世紀以降、新たな定住者を受け入れたことにより、18 世紀のナジュ

ドの中核的な都市に成長していた。

(a) バヌー・ハニーファ族のムラダ族:「サ우드家の起源」

サ우드家の起源は、現在のアラビア半島でもっとも高貴であると自称するアナザ族であるとされているが、歴史研究の立場では、それが真実であるのかははっきりしない。サ우드家の「正史」を伝えるとも言える O・ハンバリーは、アナザ族であると言うが[الحنبلي 1982: 12]、イーサーは、バヌー・ハニーファ族(بنو حنيفة)であると記した[بن عيسى 1966: 36]。特にアジュラーニーの場合は、史料を比較したり、サ우드家のメンバーと話した結論として、実はバヌー・ハニーファ族であると結論し、アナザ族という現在の自称は「政治的なもの」と結論している[المجلاني 1993: 67-79]⁽¹¹⁾。この検討の説得力は、とても高いように考えられる。サ우드家がアナザ族という高貴な部族の出自を称するように系譜を操作したことがあったとしても、部族社会にはよくあることだと言える。

いずれにせよ、サ우드家の起源として明白なのは、ムラダ族(المردة)の子孫のムライディー(المريدي)の子孫のドルーウ(الدروع)である。サ우드家の起源となるドルーウのマーニウ・ビン・ムライディー(المرع بن المريدي)は、正確な時期は定かではないが、ワーディー・ハニーファ(وادي حنيفة)を去り、カティーフの近くのドルーウ(دروع)という土地に移住していた。その後、ナジュドに残ったドルーウが、マーニウ・ビン・ムライディーに土地を与えると連絡してきたので、マーニウ・ビン・ムライディーは、1446/7 年にナジュドに帰郷した。マーニウ・ビン・ムライディーは、ディルイーヤを開墾し、その支配者となった。息子のラビーアは、近隣の定住者アール・ヤジード家(آل يزيد)に戦いを挑んだ [المجلاني 1993: 51]; [Juhany 2002: 103-4]; [بن عيسى 1966: 36]。

ラビーアの息子のムーサー・ビン・ラビーア(موسى بن ربيعة)は、近隣の集落を征服し、ディルイーヤを拡張した。また、ムーサーの息子イブラーヒム(إبراهيم)

の息子の世代の兄弟は、ディルイーヤから外へ移住した。一人目のアブドゥルラフマン・ビン・イブラーヒーム(عبد الرحمن بن إبراهيم)は、ドゥルマー(ضرما)に移住し、17世紀に入ってそこの支配者となった[Juhany 2002: 104]; [عيسى بن عيسى 1966: 37-38]。おそらくディルイーヤからドゥルマーへの移住は、16世紀のことであろう。

また、イブラーヒームの他の息子、サイフ・ビン・イブラーヒーム(سيف بن إبراهيم)は、アバール・キバーシュ(أبا الكباش)に移住し、その土地の支配者として知られるアール=ヤフヤー家となった[Juhany 2002: 104]; [عيسى بن عيسى 1966: 37-38]。また、さらにイブラーヒームの別の息子マルハーン・ビン・イブラーヒーム(مرخان بن إبراهيم)の息子ラビーア(ربيعة)は、ズバイル(الزبير)へ移住した[عيسى بن عيسى 1966: 38]。ドゥルマーからジャウウ、アバール・キバーシュ、ズバイルへの移住は、おそらく17世紀だったと考えられる。

ディルイーヤの支配者として継承したマルハーンの息子のラビーアとムクリンの子孫が、17世紀以降になると、それぞれワトバーン家(وطبان)とムクリン家(مقرن)として、ディルイーヤの支配を争うようになった。互いに暗殺を繰り返してもおり、ムクリン家の中には、暗殺された者やズバイルに移住する者が見られた。17世紀末から18世紀初めには、ワトバーン家出身の支配者が暗殺される事件が続いた[Juhany 2002: 104]; [عيسى بن عيسى 1966: 39-40]。

1695/6年ワトバーン家のムーサー・ビン・ラビーア(موسى بن ربيعة)が、出自が史料から明らかにできない当時の支配者アブドッラー・ビン・ハマド・カイス(عبد الله بن حمد القيس)を追放し、ディルイーヤの支配者となった。しかし1719/20年ムーサー・ビン・ラビーアが死亡したときにムクリン家であり、ムハンマド・ビン・サウードの父でもあるサウード・ビン・ムハンマド(سعود بن محمد)がディルイーヤの地位を継承し、1724/5年まで統治した。彼の死後は、ワトバーン家のザイド・ビン・マルハーン(زيد بن مرخان)がディルイーヤの支配者の地位に就いたが、まもなくムクリン・ビン・ムハンマド(مقرن بن محمد)が支配者の後見人の地位についた。

ムハンマド・ビン・サウードは、ディルイーヤの支配を奪い返すため、まずムクリンを暗殺した。その後 1726/7 年にザイド・ビン・マルハーンがウヤイナの支配者に暗殺されたとき、ムハンマド・ビン・サウードは、ディルイーヤの支配者となった。その後ムハンマド・ビン・サウードは、ワトバーン家を追放した [بن عيسى 1966: 39-41]; [العجلاني 1993: 57-60]。この後、ディルイーヤでは、ムハンマド・ビン・サウードによる支配が安定した。ディルイーヤの激しい権力闘争は、第一次サウード朝が発生する直前には終息していた。

ムハンマド・ビン・サウードは、1744/5 年に「シャイフ」と共にワッハーブ主義の伝道を開始し、第一次サウード朝の創始者となった。ムハンマド・ビン・サウード以後、一族はムクリン家ではなくてサウード家を名乗ることとなった。

15 世紀のマーニウによるナジュドへの再定住は、ディルイーヤ、ドウルマー、ジャウウ、アバール・キバーシュ、ズバイルといった新たな定住地を創始する契機となった。ディルイーヤは、18 世紀のはじめには、ウヤイナに次いでナジュドでは二番目に大きな定住地となった。第一次サウード朝の首都となるディルイーヤは、15 世紀以来始まった、ナジュドの定住地が増加する時代の波の中で建設され、拡大していたことが明らかである。また、サウード家は、16 世紀から 18 世紀にナジュド最強の部族であったアナザ族の出自を誇っているが、系譜を辿ると実は、バヌー・ハニーファ族に連なる一族であったと考えるのが順当だと見なす有力な説がある。

(b) バヌー・タミーム族のアナーキール族:「ワッハーブ主義が発生する以前の最多の移住」

バヌー・タミーム族(بنو تميم)は、9 世紀頃にスダイル、ワシュム(الوشم)、カシーム(القسيم)に定住しており、ナジュドでは古い時代に定住民となっていたが [Juhany 2002: 41]、17 世紀に再定住化を開始した。(b), (c), (d)では、バヌー・

タミーム族の定住民による移住について検討する。(b)では、サルマダー(ثرماء)にいたバヌー・タミーム族のアナーキール族(عنقير)、(c)ではウシャイキルのウハバ族(وهبة)、(d)ではそれ以外のバヌー・タミーム族の移住についてとりあげる。

ここでとりあげる、サルマダーに住んでいたアナーキール族は、18世紀にはナジュドの中心的な町となるウヤイナとブライダ(بريدة)への定住を16世紀の間に行った。ウヤイナは、「シャイフ」が初めて本格的な伝道活動を開始した定住地であり、ブライダは18世紀以降、カシームの首都に成長した定住地であった。

アナーキール族のハサン・ビン・タウク(حسن بن طوق)は、サルマダーを去り、マルハム(ملهم)に移住した後、ウヤイナをアール=ヤジード(ال يزيد)から購入したという。おそらくマルハムへの移住とウヤイナの購入は、おそらく16世紀の後半の出来事であったと考えられる。その理由は、4代目のハマド・ビン・ムアンマル(حمد بن معمر)は、1635年にフライミラーをバヌー・ワーイル族に売却したということや、17世紀の中頃、ウヤイナの領土を拡張し、マルハムも支配下におさめたと書き残されているからである[Juhany 2002: 105]; [عيسى بن 1966: 35]。

ハサン・ビン・タウクの子孫は、18世紀までウヤイナを支配し続けたアール=ムアンマル家(آل معمر)となった。アール=ムアンマル家は、1661/2年にアブドッラー・ビン・ハマド(عبد الله بن حمد: 1685年没)が、ウヤイナの支配者となってから、領土の拡張を目論み始めた。アブドッラー・ビン・ハマドは、ダワーシル族が支配するビールを攻撃した[عيسى بن 1966: 60]。また、その後を継いだアブドッラー・ビン・ムハンマド(عبد الله بن محمد: 1725/6年没)は、サーディク、ビール、フライミラー、アンマーリーヤ(العمارية)、サルマダー、ハルジュを攻撃した。中でも特にフライミラーとの戦いは決着がつかず、何度も戦われることになった[عيسى بن 1966: 60, 70, 71, 87, 91]; [الحنبلي 326, 327, 337, 338, 340]。

アブドッラー・ビン・ムハンマドの統治下でウヤイナは、拡張し、人口が増加し、建物が増え、著しく発展し[عيسى بن 1966: 71]て、当時のナジュドでは最

強の定住地と見做されるようになった。ウヤイナでは、ディルイーヤで起きたような激しい権力闘争は年代記に記されていないので、発展を促した要因になったのであろう。しかし、一方では、ウヤイナは、攻撃した全ての定住地の征服に成功したわけではなく、中でもフライミラーとの戦いは長引き、拡張政策は早くも限界に直面した。さらに 1725/6 年にウヤイナで伝染病が発生し、支配者アブドッラーを含む、アール=ムアンマル家の多くが死亡した。その際にディルイーヤを含む周辺の定住地は、ウヤイナを略奪しようとした。その危機は危うく回避したものの、アール=ムアンマル家による拡張政策は完全に頓挫した[الحنيلي 1974: 368-9]; [بن عيسى 1966: 98]; [Juhany 2002: 106-7]。

アール=ムアンマル家は、ナジュド最大の定住地の支配者であったとはいえ、アフサーの遊牧民、バヌー・ハーリド族に毎年貢納する状況におかれていた[الطنطاوي 1961: 17]。このような貢納は、アール=ムアンマル家が、ナジュド外部の部族から支援を受けることにより、ナジュドでの政治的優位を獲得しようとする戦略をもっていたことを示しているが、一方では、遊牧部族にフツワ税を支払わざるをえなかったという、ナジュドの定住地の軍事的な限界を明白に示していたともいえる。

サルマダーから移住したハサン・ビン・タウクの末裔は、ウヤイナの支配者アール=ムアンマル家となった。アール=ムアンマル家は、「シャイフ」の最初の本格的な伝道活動を一度は受け入れかけたが、結局は、「シャイフ」を追放してしまった家である。ただしその後、サウード家や「シャイフ」と姻戚関係を結び、サウード家の家臣となっている。

一方、16 世紀にサルマダーを去り、ブライダに定住したのは、アナーキール族のアール=アブー・ウライヤーン家(ال أبو عليان)だった。口頭伝承で伝えられている説では、アール=アブー・ウライヤーン家の中のラーシド・ビン・ドゥライビー(راشد بن دريبي)が、1577/8 年にアナザ族のハズルール族から、ブライダを購入して支配者となり、ブライダを発展させたと言われている([البري 1986:

vol.1: 50])).

ところが、ジュハニーによると、年代記を検討したM・ウブーディー(محمد العبودي)は、アナザ族から土地を購入したという説は、17世紀に創られた「物語」であり、実際には、アール=アブー・ウライヤーンは、ブライダの近くの大きな定住地、シマースに住むダワーシル族の許可を得て、ブライダに定住を開始したという。ジュハニーは、以上のようなウブーディーの説を検討し、アナザ族は16世紀には遊牧生活をしていたので、アナザ族から土地を購入するという説は事実とは考えにくいこと、他方、18世紀になるとアナザ族が最強となったために彼らから土地を購入したという過去を「創出する」必要があったと判断し、ウブーディーの説は妥当であると述べている[Juhany 2002: 108]。ムハンマド・ウブーディーの説は、ブライダが18世紀までにシマースに貢納し続けていた[الربري 1986: 53]こととも整合すると考えられる。

定住が行われた後のブライダは、やがてシマースに対抗できるほどに発展し、シマースへの貢納を停止して、シマースと戦闘を繰り返したようである。1743/4年には、シマースとザフィール族とウナイザによる連合軍の攻撃を撃退できるほどにブライダは堅固な定住地になっていた[حربي 1994: 174]; [Juhany 2002: 109]。

ブライダは、別稿で論じたいが、第一次サウード朝の時代のハマド・ビン・フジャイラーン(حمد بن حجيلان)の治世によって市街地を急速に拡大し、人口も急増するという発展を遂げ、カシーム地方の首都とされるようになった。だが、第二次サウード朝の時代でも、周辺に対する拡張政策をとったことはなかった。

また、1691/2年にアール=ジャマーズ(الجماز)がジャヌービーヤ(الجنوبية)を占領し、アナーキール族を殺害したと書かれているので[عيسى 1966: 76]、サルマダーのアナーキール族のアール=ガンナーム(الغانم)家は、おそらく17世紀中にジャヌービーヤに移住し、支配者となっていたのであろう[Juhany 2002: 110]。小さな定住地は、周辺の定住地の攻撃目標とされる危険に直面していた。

ウヤイナとブライダの2つの定住地の発展の事例からは、定住地の支配者による領土の拡張には明らかに限界があったことがうかがえる。ウヤイナは、周囲の定住地と敵対関係に陥ったことにより、征服活動が限界に直面した。また、ブライダは、遊牧民による攻撃を撃退する堅固な定住地へと発展していたが、定住地が遊牧民の保護下に入らざるを得ないという状況には変化がなかった。

定住民による再定住化

サルマダー → 16 世紀後半 ウヤイナ
 → 1577/8 年 ブライダ
 → 17 世紀 ジャヌービーヤ

(c) ウシャイキルからの移住:「ウラマーの分散」

11 世紀以来、バヌー・タミーム族のウハバ族(وهبة)が住むウシャイキルは、17 世紀頃までナジュド最大の定住地であり続けた。また、ウハバ族のムシャッラフ族(مشرف)は、16 世紀から 18 世紀までにナジュドのウラマーの2分の1を輩出していた。「シャイフ」も、このムシャッラフ族の出身であった(次節参照)。

ウシャイキルからは、やがてウラマーなどの名士を輩出することになる家が、既存の定住地への移住を行った。ウシャイキルから移住した家には、アール=パッサーム家(ウナイザの名望家、ウラマーを輩出)、アール=シャブル家(ال شبل)(ウラマーを輩出)、アール=サーニー家(カタールの首長)、アール=ラージフ家(ال راجع)、アール=アサーキル家(ال عساكر)、シャッバーナ家(شبنة) (ウラマー

を輩出)などがあげられる。それらの移住先は、ハルジュ、ウナイザ、ズバイル、マジュマア、ハルマ、トワイム、ブライダ、スダイル、マルハム、ウユーン(العيون)、リヤード、フライイク(الحريق)、ジャラージル、カタールなどであった[بن عيسى 1966: 219-228]。

また、ウシャイキルのウハバ族の住民が、定住地の中で紛争を起したために定住地を出たり、再び帰郷する事例が書き残されているが[بن عيسى 1966: 78]; [Juhany 2002: 115-6]、新しい定住地の建設が行われた事例は4つ確認できる。1689/90年アール=スカイフ家(آل صقيه)がウシャイキルを出て、クライナ(القرينة) (あるいはクッラーン(قران) [بن عيسى 1966: 75]とフライファ(حليفة)を建設した[Juhany 2002: 116]; [البسام 1974: 559]。また、アール=ブライディー家(آل بريدي)はハブ・アル=ブライディー(خب البريدي)を建設し、ムシャッラフ族の他の多くの家がフライイクに定住した[Juhany 2002: 116-7]; [الجباس 1988: 444-5]。

まとめるとウシャイキルは、11世紀以来の古い定住地であり、内部では数多くの紛争が繰り返られていた。16世紀以降にはウシャイキルからウラマーなどの名士となる家が他の定住地へ移住した一方、ウシャイキルの住民がナジュドに新しい定住地を建設した。

古い定住地からのウラマーの拡散、紛争と再定住

ウシャイキル → ハルジュ、ウナイザ、マジュマア、
ハルマ、トワイム、ブライダ、スダイル、マルハム、リヤード、その他
→ 1689/90年 クライナ
→ 1689/90年 フライファ
→ ハブ・アル=ブライディー
→ フライイク

(d) その他のバヌー・タミーム族の定住

(b)と(c)では、バヌー・タミーム族のアナーキル族やウハバ族をとりあげて検討したが、その他には、ラウダ(روضه)、ワーディー・ブライク (وادي بريك)、ファアラ(الفرعة)、ミズナブ(المننب)で、定住地を建設したバヌー・タミーム族がいた。

15 世紀にバヌー・タミーム族のマズルーウ(مزروع)が、シャンマル族からラウダを購入して移住し、支配者となった[Juhany 2002: 111-2]。その後、シャリーフ・ザイド・ビン・ムフシン(الشریف زيد بن محسن)が 1647/8 年に侵略し、マズルーウ家の支配者を殺害して、アール・アブー・サイード(ال أبو سعيد)を支配者に据えた。その後、ラウダの住民からは、ウナイザ、クウェート、ズバイル、アルカ(عرفة)、マジュマア、マジャーミジャ (المجمجة)などに移住したものがあつた[بن عيسى 1966: 56-58]。

また、バヌー・タミーム族のアール=ハンマード(ال حمد)は、スダイルから、ワーディー・ブライクの3つの定住地、ヒッラ(الحلة)、ヒルワ(الحولة)、クワイウ(القويح)に移住した。しかしそれらの移住が行われた時期ははっきりしていない[Juhany 2002: 112]。

バヌー・タミーム族のナワーシル族(نواسر)は、1700/1 年にファルアに移住していた。初めてファルアが年代記に登場するのは 1699/1700 年であるので、おそらくファルアへの移住はそれ以前の 17 世紀に行われたのであろうという[Juhany 2002: 113]。また、ナワーシル族の一部は、ファルアからミズナブへ移住した[البسام 1974: 619]。ジュハニーは、その移住はおそらく 18 世紀の初めだったのではないかと推測している[Juhany 2002: 114]。

ウシャイキルの 17 世紀から 18 世紀の再定住の移動は、経路やパターンがますます複雑していた。小さな定住地に関連する定住や再定住に関しては、詳細が不明な事例がますます増えてくる。また、再定住や混住する人々の構成も複雑化が進んだと言える。

(e) バヌー・ザイド族:「商業都市シャクラーの形成」

ヒジャーズのカダーア族(قضاة)から分離してナジュドへ移住した遊牧民のバヌー・ザイド族(بنو زيد)は、シャクラー(شقراء)、ダワーダミー(الدوامي)、シャアラ(الشعراء)、クワイイーヤ(القوية)の4つの定住地を建設した。

シャクラーの起源に関しては、多くの点がはっきりしていない。シャクラーのもともとの住民がバヌー・タミーム族のアディー族(عدي)だったということは確かである。だがアディー族がシャクラーに存在し続けたのか、それともどこかへ去ってシャクラーが住民から完全に放棄されていたのかを明確にする史料はないようである。また、バヌー・ザイド族がヒジャーズからシャクラーに移住してきた年代についても、14世紀という説も、15世紀から16世紀ではないかという説もある[Juhany 2002: 118]; [Freih 1990: 115-116]。バッサームは、バヌー・ザイド族がシャクラーを建設したことを伝えているが[البسام 1974: 816]、シャクラーへの定住の詳細に関してはさらなる検証が必要であると言えるだろう。

以上のようにシャクラーは、起源がはっきりしない定住地であるが、14世紀から16世紀の間にバヌー・ザイド族が移住した後で発展を始め、大きな定住地となったことは確かである。シャクラーは、これまで論じてきた定住地とくらべると砂漠部に入り込んだ場所にあった。このことは、定住民の生活領域が、遊牧民の地域に接近するほどに拡大していたことを示すとともに、定住民と遊牧民の経済関係を活発にしたと考えられている[Juhany 2002: 119]。シャクラーは、19世紀になるとナジュドの重要な商業都市の1つに数えられるまでに発展した。

遊牧民のバヌー・ザイド族は、クワイイーヤ周辺のスフル族(السحول)との紛争を始めた後、クワイイーヤを購入して定住した。スフル族との紛争は1711/2年に解決されたと年代記に書かれているので、定住の時期はそれより前である。

その後バヌー・ザイド族は、購入した土地に確固とした定住地を築いたことにより勢力を拡大し、スフル族との紛争では有利になったという[Juhany 2002: 119]; [Freih 1990: 117-118]。

シャアラは、アール＝ムギーラ族が放牧地としていたのだが、アール＝ムギーラ族が去った後で、バヌー・ザイド族が定住地を建設した[Freih 1990: 117]。バヌー・ザイド族の子孫であるウラマーによると、バヌー・ザイド族は、シャアラをアール＝ムギーラ族から購入したのだという[البسام 1974: 155, 440]。

ダワーダミーは、16 世紀から 17 世紀にバヌー・ザイド族が定住した。ダワーダミーの周囲には、それほどよい放牧地がなかったことから、商業の中継地として建設されたのではないかという説がある[Freih 1990: 116]。

(f) ウナイザ：「部族混合、紛争、統一」

ウナイザは 13 世紀に建設されたのだが、17 世紀以降に住民が外へ定住して、さらに新しい定住地の建設を行った。ウナイザは、20 世紀にはブライダに追い抜かれたが、19 世紀にはナジュド最大の商業都市であった。

ウナイザは、13 世紀に 2 つに分かれながら形成され、当初はウナイザという名称は存在していなかったが、バヌー・タミーム族のアール＝ジャッラーフ族(الجرار)は南側に定住し、バヌー・ハーリド族のジャーナフ家(الجناح)が北側に定住地を形成した[بن عيسى 1966: 232-233]; [Freih 1990: 118]; [Juhany 2002: 121]。それから 2 世紀半が経過した後は、隣接し合う 3 つの定住地に分かれていたが、それらは 1 つ 1 つが独立した定住地のままであった。17 世紀になるとウナイザとなる地域は、さらに拡大して 4 つの定住地になっていたが、分裂したままであった[Juhany 2002: 121-2]; [الجار 1981: 96-97, 113]。分裂状況のために全体の防御は弱かったと見られ、そのために 1686/7 年にはシャリーフ・アフマド・ビン・ザイド(الشریف أحمد بن زيد)による略奪を受けた[بن عيسى 1966: 233]と考えら

れる。1698/9 年、4 つの隣接する定住地はようやく統合され、ウナイザとなり、スパイウ族出身のファウザーン・ビン・フマイダーン・ビン・ハサン・ビン・ムアンマル・アール=ファドル(فوزان بن حميدان بن حسن بن معمر آل فضل)が支配者として選出された。彼は 1703/4 年にウナイザの一角の支配者、ジャーナフ家に暗殺されたように、その後も、支配者の座をめぐる、アール=ファドル家と合併される以前の定住地の支配者の間で紛争が繰り返されたという [Freih 1990: 119-120]; [عيسى بن عيسى 1966: 234]。分裂した街区の発展を見せたウナイザは、熾烈な内部紛争を抱え、周辺に拡張することはなかったと言える。

以上のように紛争を抱えながら発展したウナイザだったが、住民は他の地域に移住を行っていた。ラッス(الرس)は、かつてはバヌー・アサド族(بنو أسد)が住んでいたが、彼らが去った後、15 世紀に、ウハバ族のアール=スカイフ家が定住して再建した。その後でウナイザに住んでいたアジュマーン族のアール=マフフーズ家(آل محفوظ)が、1562/3 年にアール=スカイフ家からラッスを購入した。その後ラッスは、18 世紀カシームでは、ウナイザ、ブライダに次いで第三の定住地となるまでに発展した。ラッスが発展した理由の 1 つは、ラッスが豊穡な遊牧地の近くに位置していたので、遊牧民との商業活動が活発だったことがあげられている [Freih 1990: 120-121]; [Juhany 2002: 119]; [البسام 1974: 765, 926]。

ウナイザで紛争を繰り返していたジャッラーフ族のアール=アブー・ガンナーム家(آل أبو غنام)は、18 世紀にウナイザからヒラーリーヤ(الهلالية)に移住した [Freih 1990: 121-122]; [Juhany 2002: 122]。また、カフターン族のアール=アフアーク家(آل عفاق)は、17 世紀にアフサーからウナイザに移住していたが、1727/8 年に今度はハブラー(الخبرا)に移住し、定住地を建設した [Juhany 2002: 122]; [عيسى بن عيسى 1966: 93, 101]; [Freih 1990: 122]。年代記に再定住の事実は書かれても、その理由が書かれることは少ないが、ウナイザの内部抗争が影響していたと見てよいだろう。

ウナイザは、13 世紀に建設されて以来、バヌー・タミーム族のジャッラーフ

族とバヌー・ハーリド族のジャーナフ族を祖先にもつ住民などが、市街地を分割させながら発展した。ウナイザからラッス、ヒラーリーヤ、ハブラーに移住した住民の構成は、バヌー・タミーム族のウハバ族、アジュマーン族、カフターン族、ジャッラーフ族などであり、ウナイザが、部族混合と紛争を繰り返しながら発展していたことをうかがわせる。ウナイザは、18世紀の前半に、市街地の紛争を解消するための一応の和解と統合が行われたのだが、これは、部族混合によって発生する紛争を乗り越えようとする試みであったと位置づけることができるだろう。また、ウナイザから、他の定住地へ移住する者が現れていた。

(g) リヤード:「第二次サ우드朝以降の首都」

リヤードは、6世紀以来「ハジュル(حجر)」と呼ばれ、ナジュドの定住民の部族だったとみられるバヌー・ハニーファ族の首都として知られる。だが16世紀になると「ハジュル」という名称は、現れなくなった。

17世紀にこの旧市街地を支配していたのは、ムクリン家(مقرن)だった。ムクリン家が、農地を拡大し、町を発展させ始めたころ、この定住地の一部は「ムクリン」と呼ばれたり、「リヤード」と呼ばれるようになった。17世紀末にはアール=アバー・ザルア家(آل أبا زرع)が支配者となり、そのときから定住地の名前は「リヤード」に統一された[Juhany 2002: 120]。

1733/4年リヤードの支配者だったザイド・アール=アバー・ザルア(زيد آل أبا زرع)がアナザ族によって暗殺され、アール=アバー・ザルア家の奴隷、フマイイス(خميس)がリヤードの支配者の地位についた[عيسى 1966: 103]。その5年後となる1738/9年に、ザイド・アール=アバー・ザルアの母方の叔父にあたるダッハーム・ビン・ダーウース(دهام بن دواس)がリヤードの支配者となり、フマイイスは逃亡した。そしてダッハームは、ザイド・アール=アバー・ザルアの一族を追

放した[بن عيسى 1966: 104-105]。

リヤードは、第一次サウード朝に 20 年以上にわたり抵抗した後でその軍門に下った。そしてオスマン帝国の命を受けたエジプト軍によって第一次サウード朝の首都ディルイーヤが破壊された⁽¹²⁾後は、第二次サウード朝が始まるとともにサウード家の新しい首都となった。

III で検討してきたように、ナジュドでは、ワッハーブ主義の出現に先立って、15 世紀から 18 世紀の間に遊牧民が定住化を進めており、他方、もともとあった定住地の定住民も、新しい土地へ移住を開始していた。豊富な雨量によって生産力が向上したため、人口が増加し、既存の定住地や放牧地には、過密や資源の不足の問題が発生した。これらの問題を解決するために定住化や移住が行われたと考えられてきた。

ただし、本項での検討の結果、建設された定住地では、しばらくすると内部で紛争が始められたり、新たな定住地を求めて移住する人々が現れていた。開拓された新たな定住地の産業は、農耕や半遊牧だったと考えられるが、これによって、それまで使用されていなかった土地や水などの資源が活用されることになったはずである。また、遊牧民と近い地域に建設された定住地は、遊牧民との商業関係をきっかけに商業拠点となり始めた。新たな定住地では、生産力が向上し、人口がさらに増加したと考えられる。

つまり、人口増による過密を解消するために建設された定住地が、さらに人口を増加させたという、成長のサイクルが始まっていたのであらうと考えられる。定住化は遊牧生活に戻るまでの間の一時的なものではなく、定住民社会の発展は不可逆的な方向となり始めていたと言えるだろう。

15 世紀の定住民社会の拡大では、部族混合が重要な要因となっていた。部族混合が進行することによって、定住地の人口が増加し、新たな定住地の建設が行われた。ただしこの段階では、部族混合は、定住民社会の発展の要因となっ

たともいえる一方で、政治的な紛争の原因ともなっていた。ウナイザでは、市街地の分裂を解消する自発的な統合が住民によって行われたが、この事例は、政治的分裂が解消されたならば、定住民社会は、さらに発展を遂げることが可能だったことを示していた。ただし、当時のナジュドの定住民社会は、アフサーのパヌー・ハーリド族に朝貢したり、たびたびシャリーフ家による略奪にあっていたように、脆弱なままであった。

IV 定住民の政治社会構造の発展の限界

定住民の社会は 15 世紀から拡大していたが、遊牧民社会の優位を覆すことはできず、部族社会を首長制社会や国家に発展させることができなかった。そこで本項では、定住民の政治社会構造は、どのような限界をもっていたのか検討される。

政治的には、ワッハーブ主義以前の定住地の支配者は、いくつもの課題に直面していた。第 1 に定住地は、周囲の定住地への征服活動を継続したり、遊牧部族を征服するような強大な軍事力を獲得できなかった。ナジュド最大の定住地であったウヤイナの支配者アール＝ムアンマルでさえ、遊牧部族から自分の町を防衛することはできたが、ナジュドの他の定住地を征服しようとする試みは失敗に終わった。

第 2 に、定住民の支配者には、政治的権力を支える特別な行政機構はないに等しく、彼の一族が最も頼りになる補佐である状況だった[Juhany 2002: 98]。第 3 に、多くの定住地は、定住地の中で繰り返される紛争を解決できなかった。第 4 に、定住地の支配者が、他の定住地や部族との政治的連合を形成することはなかった。

以上のような課題を解決できなかった要因は、支配者に十分な富が集中されなかったこと、支配者が正当性を獲得できなかったこと、結果として遊牧社会

が優位な社会が内包する限界を克服できなかったことが指摘できる。

多くの場合、定住地の支配者は、新しい定住地を最初に開墾したり、発展させた家であった。新しい土地へ移住し、定住地を建設した支配者の一族は、「未使用地の開墾(イフヤー・アル=マワート *الموات*)」の制度によって新たに彼らが開墾した土地を入手した[Freih 1990: 136]; [Juhany 2002: 80]; [Altorki 1989: 35]。

支配者は、彼ら自身が大地所有者となろうとただけではなく、新しい移住者を受け入れて、耕作をさせようと試みたと考えることができる。ワッハーブ主義の発生以前のカシームのウラマーの裁判記録を参照したという研究では、ムサーカー (*المساقاة*) 契約やムザーラア (*المزارعة*) 契約が頻繁に見られたという。ムサーカー契約は、既に関墾された土地を水資源とともに農民に分益小作契約として与えるもので、農民は収穫の半分を灌漑のために返却することとなっていた。ムザーラア契約は、新しい移住者などが、まだ開墾されていない土地に関する小作契約だった。以前からその土地を所有していた者と、小作を行う者が、土地を共同で所有することとされるが、労働を行う小作が、もともとの土地所有者に収穫物の 4 分の 1 を支払う制度であった[Juhany 2002: 101]。

このような小作契約がひろまった理由は、新しい土地を開墾しようと考えている者は、全く孤立した土地を開墾するよりは、先住している遊牧民や定住民が庇護を与えてくれる場所の方が有利だったからである[Juhany 2002: 101]。支配者は、住民を防衛する見返りとして、「収穫税」(マサーリフ・バラド *مصاريف باراد*) またはクフラト・アル=バラド (*كفلة البلد*) や商業税(ルスूम *رسوم*) を徴収した。収穫にかけられる税の税率は、定住地によって異なっていた。収穫の半分という定住地もあれば、4 分の 1 という定住地もあった[Juhany 2002: 99-100]; [Freih 1990: 196]。

また、支配者は、戦争によって近隣の定住地を征服し、収穫税を徴収しようと試みた。ラウダの支配者の場合は、ダーヒラから収穫の 4 分の 1 を徴収した。

サルマダーの支配者の場合は、シャクラーやウサイフィーヤ(أنبيغة)から、定額ではなかったが、収穫の一部を受領した[Freih 1990: 195]。

定住地の支配者は、土地を所有していたが、それを小作人に貸し出して小作料を受け取る一方、住民からは収穫税や商業税を徴収した。さらに近隣の定住地を征服して徴税を試みた。定住地の中では、明らかに貧富の格差が発生していた。定住地の支配者は、遊牧部族の指導者とは異なり、富の蓄積を妨げるような再分配の習慣はなかったと考えられる。

ただし第一次サウード朝が始まる前の最大の定住地がウヤイナだったように、1つの定住地の支配者が獲得していた収入には、限界が大きかったと考えられる。

15世紀から18世紀にかけてナジュド全体の経済的生産力には著しい向上が見られていたと考えられるが、定住地の社会は統合されていなかった。各定住地から徴税を行って、定住地の富を集積するような統一された政治機構は誕生していなかったのである。

フライフは、ワッハーブ主義が発生した経済的な背景として、遠隔地貿易の活発化を指摘している。フライフによると、ナジュドの遠隔地交易は、早魃のときに食糧を自給できなくなった部族が、不足分を補うために、イラクから食料を購入したことによって始められたという。また、フライフは、16世紀にオスマン帝国が地中海を支配下におさめたため、バスラとアレppoの間に遠隔地貿易の交易路が開通され、ナジュドには、イラクやシリア、アラビア湾での交易に従事する商人が出現したのだという[Freih 1990: 214]。

しかしフライフによるナジュドの商人の起源に関する実証は、成功していないと考えられる。フライフがあげる商人の実例は、イラク、バハレーン、シリアなどで活躍する商人や、ワッハーブ主義が始められた後となる18世紀後半以降の商人の事例である[Freih 1990: 215-216]。17世紀までにも「ウカイラート(عيلات)」などと呼ばれるカシームの商人がアラビア半島の内外で遠隔地貿易

に従事していたことは明らかなのであるが、フライフがあげる事例は、16世紀から17世紀にナジュドに拠点を構えた有力な商人が現れていたことを証明するためには適切ではないと考えられるのである。

むしろ、第一次サウード朝が発生した後の18世紀後半から19世紀初めとなると、イラクやアラビア湾を経由する交易が活発となり始めたと考ええると自然な考察となる。1775年から1779年にザンド朝がバスラを占領した事件は、バハレーンやクウェートの重要性を高め、ペルシャ湾の貿易拠点を分散化させた[Juhany 2002: 124]。1779年にオスマン帝国がスエズ港での通商を禁ずる命令を発したことにより、ペルシャ湾岸方面のアラビア半島の遠隔地貿易は活発となった[شامية 1989: 40]。別稿で改めて論じたいが、ワッハーブ主義が始まった後で遠隔地貿易に従事するナジュドの商家が次々と出現し始めたのである。この点では、サウディアラビアの国家形成においては、商人は、部族社会から首長制社会の形成ではこれといった役割は確認できないこととなる。

18世紀初めまでのナジュドの商業が特に著しい発展を見せていなかったと考えられるならば、17世紀までの定住地の支配者は、彼の支配下の農民や牧畜民による生産から富を蓄積しなければならないという限界を抱えていたと言えるだろう。

定住地の支配者は、戦争を遂行するためにも、定住地の防衛に必要な壁や監視塔や砦を建設するためにも、町の有力者の助力が必要であり、彼らの合意を必要としていた。また、支配者は、支配下の住民を庇護する代わりに税を徴収することによって、住民との間に軍事的共同体を形作っていたと推測することができる。

ワッハーブ主義が始まる以前の定住地の支配者の統治イデオロギーは、どのような限界をもっていたのだろうか。定住地の支配者は、「ルアサー(رئساء)」、「ウマラー(أمراء)」、「シュユーフ(شيوخ)」などと呼ばれたが、彼らは、定住地を開拓して支配者となった一族の末裔であり、先祖の支配権を継承する権利があると

主張していたという [Freih 1990: 196-197]; [Juhany 2002: 97]; [Dakhil 1998: 193]。

ルアサーによる統治は、最初の 2 世代程度は安定的に推移したが、その後では一族内で継承争いが発生したり、定住地内の紛争に巻き込まれることが多く見られた。年代記では、支配者の一族内の争いに関しては数多くの事例が記されるものの、その原因に関してはほとんどふれられないことがない。定住地から徴収される税が、支配一族の中で争奪されたことなどが考えられるが、明確には記されていない。フライフは、遊牧部族の場合と同様に、継承の仕組みが決定されていなかったことが、紛争を悪化させたとしている [Freih 1990: 197-200]。定住地の社会は、遊牧部族のように同じ一つの親族の集団が集合していたのではなく、混住していたのだから、血筋や家柄は、正当性の源泉としては低い影響力しかもたなかったであろう。

前節で議論したように遊牧部族の場合は、「内部分節化」などの政治的な分裂の現象がみられた一方で、一定の政治的な統合機能が働いていたので、軍事力を維持することができた。他方、個々の定住地は、部族が拡散し、解体される過程で建設されたこともあり、1つ1つが独立した政治共同体でしかなかった。それらが統合されるためには、新たな統合原理が必要とされていたのだった。

定住地の法体系は、ウラマーが存在するようになった大きな定住地を除けば、慣習法のままであった。定住地の支配者の中には、自分の政治的権威が脅かされることを恐れ、シャリーア法の裁判官を受け入れようとしなかった者がいたという [Juhany 2002: 99]。

以上のように一つ一つの定住地は、その垣根を超えた支配を樹立するためには多くの限界をかかえていた。定住地の支配者は、血縁や家柄に依存した論理によって正当性を主張するのみだった。定住地には、いまだワッハーブ主義のように、部族的分裂を乗り越えることが可能な統治イデオロギーは樹立されていなかった。

前項では、遊牧民の定住化によって遊牧民と定住民の間の商業関係が活発となった場合には、部族社会が変革する可能性があった点について議論された。しかしまだ 18 世紀の初めには遊牧部族が定住民に対して優位に立っていた。

フック税や通行料を通じた庇護関係は、安全の確保のためには不安定であった。その理由は、いくつもあげられる。遊牧部族の領地は限定されていたので、ある部族の領地から別の部族の領地を移動する場合には、再度通行料を支払わなければならなかった。また、遊牧部族同士の力は拮抗していたので、絶対的な安全は確立されず、多くの略奪事件が発生していた。遊牧部族は、自分の領地では遠隔地貿易や巡礼を保護する一方で、隣接する別の部族の領地では略奪を試みていたと言える。

以上のように遊牧部族による群雄割拠の状況は、治安が不安定だったため、定住民による農耕や商業の発展は抑制されることになった。

定住民の支配者は、農耕民に重税を課し、小作契約によって収穫物を納めさせることによって、富を徴収する仕組みをつくりあげつつあった。ナジュド全体の生産力は向上していた。しかし定住民の支配者は、定住民の間の政治的分裂を克服する正当性の原理や、遊牧民社会の優位を覆すことを可能とする軍勢力をまだ獲得していなかった。

V ワッハーブ主義発生の社会的背景

前節まででは、「シャイフ」の伝道活動の拠点となったフライミラー、ウヤイナなどの定住地が形成されたり、ディルイーヤやリヤードといったサ우드家の首都が形成されたり、後にサ우드家の家臣となる地方支配者が出現していたことが確認された。さらに生産力の向上や人口の増加など、中央政府の樹立を可能とするような潜在的な資源が形成され始めていた。しかしそれらを統合

することを可能とする政治社会構造は、遊牧部族にも定住民にもなかったことが示された。

よく知られているように (たとえば[中田: 2002])、第一次サ우드朝の拡大は、「シャイフ」の伝道活動が、1744/5 年にサ우드家によって受け入れられたときに始まった。本節では、「シャイフ」がナジュドで誕生し、ムスリム世界の学問の伝統を受け継ぐ一方で、革新的な伝道を開始するにいたった社会的な背景について検討する。

本節では、「シャイフ」による伝道活動が発生した社会的背景として、3つをとりあげることにする。第1は、ナジュドのウラマーの数が16世紀から18世紀に増加しており、イスラーム学の層が厚くなっていたことである。

第2に「シャイフ」の先祖はナジュドでも指折りのウラマーを輩出したムシャッラフ族であったことである。彼は幼少のときに父からイスラームについて学んでいた。彼の家は、ナジュドのウラマー全体の学問レベルが向上する中で出現したと考えることができる。

第3に「シャイフ」の独特の思想が形成された学問的素養としては、ナジュドで盛んであったフィクフばかりではなく、ハディース学が重要な要素として指摘されている。「シャイフ」はハディース学をヒジャーズで学んだが、ムスリム世界全体でハディース学のレベルが向上していたことが指摘される。

[البسام 1974]は3巻本であるが、過去6世紀の間の338名のウラマーが記されている。[البسام 1974]には、[الحنيلي 1974]などの他の年代記からの引用もあるが、オリジナル性の高い史料である。その中には、16世紀から18世紀に活躍したウラマーとして85名がリストされている。その内訳は、16世紀に活躍したウラマーは15名、同じく17世紀には28名、また18世紀には52名となっていた[Juhany 2002: 133]。この史料がナジュドに存在した全てのウラマーを記述しきれているわけではないのではあるが⁽¹³⁾、16世紀から18世紀までの間にウラマーの数が着実に増加していたことがうかがえる。

16 世紀から 18 世紀前半までの間、これらのウラマーの活動は、ウシャイキルとウヤイナが中心地となっていた。16 世紀のナジュドでは、15 名のウラマーのうち、9 名がウシャイキルの出身であった。17 世紀のナジュドでは、28 名のウラマーのうち、15 名がウシャイキル出身であった。ウヤイナは、16 世紀に建設された定住地であると考えられるが、17 世紀に 6 名のウラマーの移住を受け入れていた[Juhany 2002: 134]。

ウシャイキルがこのようにナジュドのウラマーの拠点となった理由は、ウシャイキルが 13 世紀以来の古い定住地であったことのほか、16 世紀という早い時期にシリアやエジプトに留学した学者が戻ったことが指摘できる。

17 世紀には、ウシャイキルとウヤイナ以外にも、ディルイーヤ、アウダ、クライン(القرين)、マジュマアなどにもウラマーが居住するようになった。18 世紀になると、52 名のウラマーのうち、ウシャイキル、ウヤイナ、リヤードの三カ所以外に住むウラマーの数は 27 名となっており、それらの定住地が依然として重要だった一方で、ナジュドの各地にウラマーが次第に広まりつつあったといえる[Juhany 2002: 134-5]。

ダヒールによると、以上のようなウラマーの増加が、「シャイフ」の伝道活動の推進を助けたと考えられるデータが示されている。[البسام 1974]にリストされている 18 世紀のウラマーの数は、57 名だった。ダヒールによると、その 57 名の中で、16 名はワッハーブ主義運動に反対する立場を表明し、「シャイフ」の伝道を受け入れようとはしなかった。16 名のうち、10 名は「活発な反対活動」を展開したが、6 名は「シャイフ」の議論に納得しなかったり、運動へ参加しなかった「消極的反对者」だったという。また、[البسام 1974]以外の年代記や書簡などの中で『シャイフ』の伝道に反対したウラマーが、17 名数えられることができる。その中で、7 名は「活発に反対運動」を展開し、10 名は「消極的な反对者」だったという。

以上を合計すると、「シャイフ」と同時代のウラマーの数は 74 名となり、そ

の中で「シャイフ」の伝道に反対したウラマーは 33 名だった。すると、「シャイフ」の伝道に賛成したウラマーの数は 55%で、反対者は 45%だったことになる。反対者の内訳は、「活発な反対活動」をしたウラマーが 23%、「消極的な反対者」は 22%となる[Dakhil 1998: 53-54]。「シャイフ」の伝道は、ナジュドのウラマーに支えられた側面が多かったのだろうと考えることができる。

また、ウラマーとしての修業は、モスクでの教育活動を受けるにせよ、巡礼の旅に出るにせよ、アラビア半島の外への学究の旅に出るにせよ、相応の資金が必要であったといえる[Dakhil 1998: 190]。定住民社会で産出された余剰が、イスラームの学究のために用いられたといってもよいであろう。あるいは、巡礼自体が商行為と一体となっていた場合もかなりあったとだろうから、巡礼が商業を盛んにしたということも言えるかもしれない。

ナジュドのウラマーの学問レベルは、ナジュドのウラマーが、16 世紀以降、シリアやエジプトに旅に出てハンバリー派ウラマーを訪問し、イスラーム学を学んだことにより向上した。16 世紀の 15 名のナジュドのウラマーのうち、ダマスカスやカイロへの学究の旅に出た経験があった人数は、ジュハニーは 5 名と述べるが[Juhany 2002: 129-30]、[البسام 1974]で確認すると 6 名であった。それらは、アフマド・ビン・アトワ(أحمد بن عطوة)、フサイン・ビン・アリー・バツサーム(حسين بن علي البسام: ウシャイキル生:d.1538/9) [البسام 1974: 215-6]、ザーミル・ビン・スルターン(زامل بن سلطان: ムクリン生:17 世紀中頃没) [البسام 1974: 261-2]、アフマド・アビー・フマイダーン(أحمد أبي حميدان: 生地不明:没年不明) [البسام 1974: 154]、ムハンマド・アビー・フマイダーン(محمد أبي حميدان: 生地不明:没年不明) [البسام 1974: 154]、アフマド・ビン・ムハンマド・ビン・ムシャッラフ(أحمد بن محمد بن مشرف)であった。

エジプトやシリアで研鑽を積んだウラマーは、ナジュドに帰郷すると高い学識を評価され、弟子をとって教育活動を行った。ナジュドの外で学んだ知識をさらに弟子へと伝える、16 世紀から 18 世紀までの師弟関係の連鎖について、

ジュハニーはまとめている[Juhany 2002: 130-1]。その誤記を修正したものが、以下の「図 16 世紀から 18 世紀へのウラマーの師弟関係の連鎖」である(判明したかぎりで、各ウラマーの出身地と没年が記されている)。

16 世紀にダマスカスで学んだ 6 名のウラマーは、アフマド・アスカリー(أحمد العسكري)やムーサー・ハジャーウィー(موسى الحجاوي)などに学んだ。それらの 6 名の中で、弟子に教えが継承されたことが明確に判明するのは、アフマド・ビン・アトワとアフマド・ビン・ムハンマド・ビン・ムシャッラフである。

実在した師弟関係には、史料に残されなかったものがあるだろうし、また、上記には、[البسام 1974]に記された師弟関係の全てがまとめられているわけでもない。実在した師弟関係は、上の表よりも、複雑であろう。だが、「シャイフ」の出現に至る流れは、十分に記されていると考えられる。

ナジュドのウラマーは、全てハンバリー法学派に属していた。その理由についてフライブは、ナジュドの人々は商業活動によってシリアやエジプトとの接触があったために、13 世紀から多くのハンバリー派ウラマーの活動の場となっていたダマスカスやシリアへ学究の旅に出かけるウラマーが多かったのではないかと推測している[Freih 1990: 317-318]。

図 16 世紀から 18 世紀へのウラマーの師弟関係の連鎖(1)

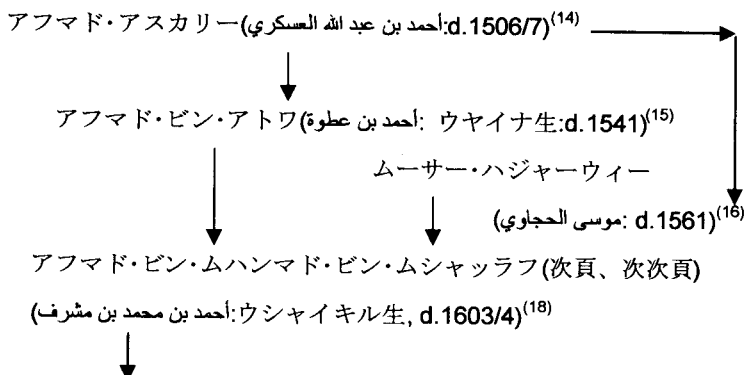


図 16 世紀から 18 世紀へのウラマーの師弟関係の連鎖(2)

アフマド・ビン・ムハンマド・ビン・ムシャッラフ(再掲、次頁)

ムハンマド・ビン・イスマイル

(محمد بن إسماعيل:ウシャイキル生, d.1649/50)⁽¹⁸⁾

→アフマド・ビン・バッサーム

(أحمد بن بسام:ウシャイキル生, d.1629/30)⁽¹⁹⁾

→アブドッラー・ビン・ザフラーン(次頁)

(عبد الله بن ذهلان:ウヤイナ生, d.1687/8)⁽²⁰⁾

→アフマド・ビン・ムハンマド・クサイイル

(أحمد بن محمد القصير:ウシャイキル生, d.1712/3)⁽²¹⁾

→アブドルラフマン・ビン・イスマーイール

(عبد الرحمن بن إسماعيل:ウシャイキル生, d.1656/7)⁽²²⁾

→イブラヒーム・ビン・イスマーイール

(إبراهيم بن إسماعيل:ウシャイキル生, d.1696/7)⁽²³⁾

→アブドッラー・ビン・ムハンマド・ビン・イスマーイー

ل(عبد الله بن محمد بن إسماعيل:ウシャイキル生、没年不明)⁽²⁴⁾

→アフマド・ビジャーディー

(أحمد البجادي:ウシャイキル生, d.1667/8)⁽²⁵⁾

→ムハンマド・バシーリー

(محمد البشير:生地, 没年不明)⁽²⁶⁾

▼→アブドルラフマン・ビン・ザフラーン

(عبد الرحمن بن ذهلان:ウヤイナ生, d.1688)⁽²⁷⁾

図 16 世紀から 18 世紀へのウラマーの師弟関係の連鎖(3)

アフマド・ビン・ムハンマド・ビン・ムシャッラフ(再掲)

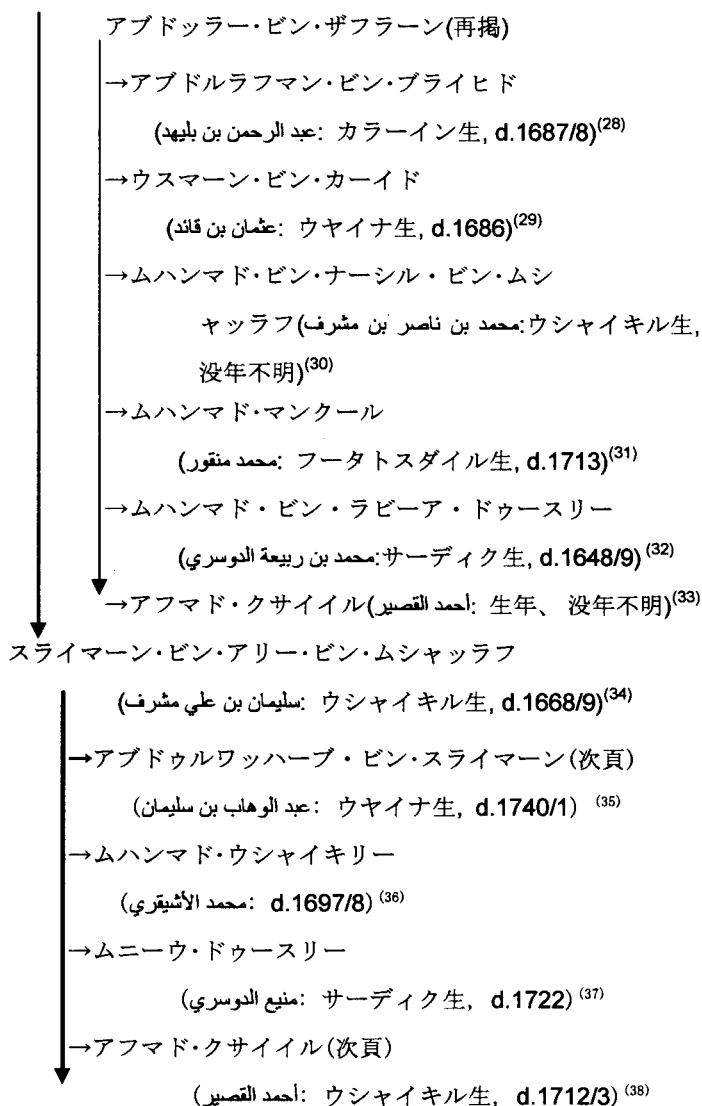


図 16 世紀から 18 世紀へのウラマーの師弟関係の連鎖(4)

アフマド・アル=クサイイル(再掲)

アブドウルワッハーブ・ビン・スライマーン(再掲)

→イブラーヒーム・ビン・スライマーン・ビン・ムシャ
ツラフ (إبراهيم بن سليمان بن مشرف: ウシャイキル生, 1728/9
年没)⁽³⁹⁾

→アブドルラフマン・ビン・イブラーヒーム・ビン・ムシ
ャツラフ (عبد الرحمن بن إبراهيم بن مشرف: ウヤイナ生,
d.1792)⁽⁴⁰⁾

→スライマーン・ビン・アブドルワッハーブ
(سليمان بن عبد الوهاب: ウヤイナ生, d.1794)⁽⁴¹⁾

→ムハンマド・ビン・アブドウルワッハーブ
(محمد بن عبد الوهاب: ウヤイナ生, d.1791/2)⁽⁴²⁾

→ムハンマド・アル=クサイイル(محمد القصير: ウシャイキル生,
d.1726/7)⁽⁴³⁾

→ハサン・アバー・フサイン(حسن أبا حسين: ウシャイキル生,
d.1711)⁽⁴⁴⁾

→ムハンマド・ビン・ラビーア・ウースジー
(محمد بن ربيع العوسجي: サーディク生, d.1745)⁽⁴⁵⁾

→ムハンマド・ビン・シャツバーナ(محمد بن شبانة: 没年不明)⁽⁴⁶⁾

図 16 世紀から 18 世紀へのウラマーの師弟関係の連鎖(5)

アフマド・アル=クサイイル(再掲)

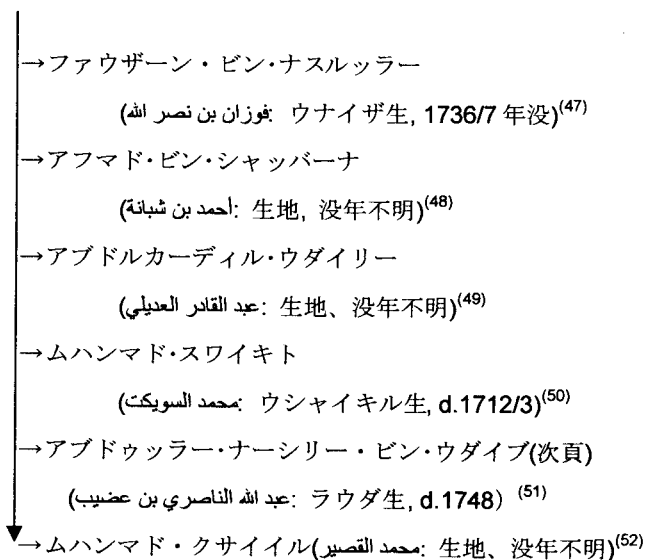


図 16 世紀から 18 世紀へのウラマーの師弟関係の連鎖(6)

アブドゥッラー・ビン・ウダイブ(再掲)

→サーリフ・サーイグ

(صالح الصائغ: ウナイザ生れ, d.1770/1)⁽⁵³⁾

→マンスール・ビン・トゥルキー

(منصور بن تركي: ウナイザ生, 没年不明)⁽⁵⁴⁾

→フマイダーン・ビン・トゥルキー

(حميدان بن تركي: ウナイザ生, d.1788/9)⁽⁵⁵⁾

→ムハンマド・アパールハイル

(محمد أبا الخيل: ナブハーニーヤ生, d.1751-62)⁽⁵⁶⁾

→スライマーン・ビン・ザーミル

(سليمان بن زامل: ウナイザ生, 1748 年没)⁽⁵⁷⁾

→ムハンマド・ビン・ザーミル

(محمد بن زامل: ウナイザ生, 没年不明)⁽⁵⁸⁾

→アブドッラー・ビン・アフマド・ビン・イスマール

(عبد الله بن أحمد بن إسماعيل:

ウシャイキル生, d.1782)⁽⁵⁹⁾

ジュハニーは、ナジュドのウラマーの中で、ダマスカスやカイロへの学極の旅に出た者の割合は、16 世紀にもっとも高く(筆者の確認で 15 名のうち 6 名、

40%)、17 世紀(7 名で全体 28 名の 25%)、18 世紀(3 名)と、時代が下るに従って低下したという。その理由は、高名なハンバリー学派の学者が見当たらなかったからではないかという[Juhany 2002: 132-3]。しかし、アラビア半島で、ハンバリー法学派が活発になりつつあったと言うこともできるのであろう。

ナジュドのウラマーの学問レベルが向上する中で、「シャイフ」の家が出現したことは間違いない。「シャイフ」は、生地はウヤイナだが、血筋はバヌー・タミーム族のウハバ族のムシャッラフ族の出身であった。16 世紀から 18 世紀までに現れたナジュドのウラマーのうち、2 分の 1 以上がムシャッラフ族の出身であった[Juhany 2002: 138]。16 世紀のアフマド・アスカリーは「ウラマーの師弟関係の連鎖」の起点となり、最も多くの弟子を連ねたが、「シャイフ」の祖父スライマーン・ビン・アリー・ムシャッラフ(1668/9 年没)は、この流れを汲み、ナジュドの学問の伝統を受け継いでいた。アフマド・アスカリーと、その弟子のアフマド・ビン・アトワはナジュドの外で研鑽を積んだ。アフマド・ビン・アトワから学んだアフマド・ビン・ムハンマド・ビン・ムシャッラフ(1603/4 年没)の弟子の一人が、シャイフの祖父スライマーンだった。スライマーンは、ウヤイナの裁判官だったが、当時、ナジュドで最も学が高いウラマーの一人としての名声を獲得したという[البسام 1974: 309-313]。「シャイフ」の父、アブドゥルワッハーブ(1740 年没)は、父の後を継ぎ、ウヤイナの裁判官となり、その後、フライミラーの裁判官となった[الحنبلي 1982: vol. 2: 370]。「シャイフ」は、この父から幼少のときにイスラームについて学んでいた[الحنبلي 1982: 33]。

「シャイフ」は、ヒジャーズで研鑽を積み、イラクとアフサーへの旅を終えて、父がいるフライミラーに帰郷したときには、父とは異なる思想をもつようになっていた。帰郷してから間もなくして「シャイフ」は、父の思想が誤りであると論争を挑んだことが伝えられている。「シャイフ」は、父が死ぬまでは伝道活動を自制し、父の死後、彼のタウヒード思想をフライミラーで伝道し始めた[الطنطاوي 1961: 21]。

「シャイフ」が革新的な改革思想のアイディアを得たきっかけは、彼がヒジャーズでハディース学を学んだことだったと指摘されている。彼の独自の改革思想は、彼のハディース学への造詣に裏付けられていた。また、彼のハディース学への造詣は、当時のナジュドの水準を大きく上回っていたのだろうと考えられる。

16世紀のナジュドのウラマーのイスラーム学は、フィクフが中心であった。この理由は、当時のナジュドのウラマーが、裁判官に就任することが求められたことや、神学(كلام)を忌避するハンバリー派の流れを汲んでいたからだろうという[Freih 1990: 323]。

フライフの研究によると、ムスリム世界では、ハジャール・アスカラーニー(حجر العسقلاني)とアル=ジャラルール・アル=スユーディー(الجلال السيوطي)がハディースの文献を編纂したことをきっかけに、ハディース学が活発になり始めた。15世紀インドでは、預言者ムハンマドの生活を模範とすべきであると提唱されたことをきっかけにハディース研究が活発となり始めた[Freih 1990: 324-5]。

ヒジャーズでは、アリー・ムッタキー・ヒンディー(علي المتقي الهندي) (1567 年没)によるハディース研究を嚆矢として、ハディース学研究に従事するウラマーが続いて現れることとなった。そしてシャイフが学んだ18世紀のメッカは、アラビア半島の内外からハディースを学ぼうとする人々が訪れる、ハディース学の中心地に成長していた[Freih 1990: 325-334]。

「シャイフ」がヒジャーズで師事した、ムハンマド・ハヤート・シンディー(محمد حيا السندي: 1751/2 年没)は、ハディース学者として当時高名なウラマーであった[Freih 1990: 334]。「シャイフ」は、彼から、多神崇拜(shirk)を行う者は不信心者であるという、コーランの句やハディース解釈を学んだ。ムハンマド・ハヤート・シンディーの教えが、聖者崇拜を忌避して、タウヒードを教義の柱に据える「シャイフ」のタウヒード思想の基礎になったことが知られている[الطنطاوي 1961: 15]。「シャイフ」が学んだハディース学は、当時のイスラーム世界全体

におけるハディース学の隆盛の中に位置づけられるものであった。

「シャイフ」の出現は、ナジュドのウラマーがエジプトやシリアへの留学を重ね、学問の伝統がナジュドで培っていた中の出来事であった。ナジュドでも指折りのウラマーを輩出した彼の一族ムシャッラフ族は、このような時代的背景の中で現れた。とはいえ、「シャイフ」の改革思想は、ナジュドのフィクフの伝統を越えて、ムスリム世界全体におけるハディース学のレベルの向上を受け継ぐ中で形成されたものだったと言えるだろう。

ナジュドにおけるイスラームの復興は、定住民社会の拡大と歩調を合わせて静かに進行していた。「シャイフ」の伝道活動は、フライミラー、ウヤイナ、ディルイーヤを初めとしたナジュドの定住民社会の拡大を背景としていたと改めて確認できる。

VI まとめ

11世紀以来、遊牧民社会は、中央政府の形成を促さない政治経済構造を再生産し続けていた。15世紀から18世紀までの間に、遊牧民の定住化や新しい定住地の建設が進行し、定住民の社会が次第に形成されていた。定住民の社会は、次第に人口や生産力を向上させていたと考えられるとはいえ、政治的に分裂しており、それを統合するための正当性の原理も軍事力ももっていなかった。この定住民の社会は、ナジュドに政治的分裂を再生産する遊牧社会の優位を覆すことはできなかった。

一方では、定住民の社会は、変化の萌芽を生み出していた。定住地は、農耕や牧畜によって経済生産力を高めつつあったと見られる。また、部族的分裂を乗り越える価値観であるイスラームの担い手、ウラマーを輩出し始めていた。ナジュドは、定住民社会の統合を可能とするイデオロギーの出現と行政機構の樹立があれば、変貌を遂げることが可能となっていた。

註

(1) 現在サウディアラビアでは、ナジュド南部の遺跡に関する発掘や研究も進められているが、1979年に調査が行われたときは、ジャーヒリーヤ以前の時代に建設されたと見られるカナートの一部がまだ使用されていたという[Zarins 1979: 27-29]。

(2) バヌー・ハーリド族がナジュドに出現した経緯は、諸説あるものの、[الطيب 1997: vol.5: 267-8]; [الوهبي 1989: 39-64]; [حربي 1994: 80]を参照。ザフィール族のナジュドへの移住については[حربي 1994: 270]を参照。ナジュドにアナザ族が現れた経緯については、[الطيب 1997: 3: 53]や[حربي 1994: 47, 83-84, 131, 205, 223, 226]を参照。ナジュドにムタイル族が出現した経緯については、[Juhany 2002: 65-6]や[حربي 1994: 94]などを参照。ダワーシル族がナジュドに出現した経緯については、[حربي 1994: 253-256]を参照。

(3) アジュマーン族のナジュドへの移住やナジュドでの戦闘については、[الطيب 1997: vol.5: 388]や[حربي 1994: 186, 188]を参照。カフターン族がナジュドに出現した経緯については、[حربي 1994: 290]などを参照。ウタイバ族がナジュドに出現した経緯については、[حربي 1994: 276]などを参照。

(4) アラビア半島を旅したブルクハルトによると、19世紀初め、ラクダを10頭程度しか所有しないベドウィンは貧しく、30頭から40頭なら豊かな方であったという。ナジュドのベドウィンの1年の消費支出額は\$20以下だったというが、ベドウィンが牧畜以外の労働で一月程度働いても\$3程度の所得しか得られず、これでは購入できる商品はほとんどなかったという[Burckhardt 1992: vol.1: 70, 245]。

(5) ナジュドでは、定住地の長にはアミール(أمير)という称号が広く用いられて

- いる。本論文では、アミールには以下の3つの訳をあてることにする。(1)一つの独立した定住地の「支配者」、(2)中央政府によって承認された「知事」、(3)「首長制社会」であるサウード朝とラシード朝の元首に相当する「アミール」。
- (6) 本論文では、「最高部族長」をカビーラ(قبيلة)の長とする。また、「最高部族長」より下位の部族集団(アシーラ عشيرة、ファフズ فخذ、カウム قوم)の長は、全て「部族指導者(sg. シャイフ شيخ, pl. シュユーフ شيوخ)」とする。
- (7) 次項で「内部分節化」概念について論じられるように、エバンス-ブリチャードが「ヌエル」で論じたような分節システムのモデルは、アラビア半島には適用できない。
- (8) 研究によって呼び名が異なるが、英語では lineage や kinship と訳されたり、アラビア語では فخذ(ファフズ)という語でしばしば示される。[Haddad 1981:156-157]; [Musil 1928b: 47]では kinship; [コウル 1975: 122-123]ではリネッジ lineage; [الغامدي 1990:47]ではラフマ(لحمة)と呼んでいる。
- (9) [片倉 1986: 175]; [Haddad 1981: 161]; [コウル 1975: 131]. ;カビーラ(قبيلة)は、しばしば「部族」(tribe)あるいは「部族連合」(tribal confederacy)と訳される。アシーラ(عشيرة)は、「クラン(clan)」あるいは「部族」と訳される。なおアシーラとカビーラの関係は、ルワラ族の場合には通常の用法とは逆で、アシーラがカビーラよりも大きな単位であるという。[Lancaster 1981: 28].
- (10) フツワ税の例は、アジュマーン族がアワージム族から徴税した例、ルワラ族がフタイム族や定住民からフツワ税を徴税した例などがあげられ[Haddad 1981: 197]; [Musil 1928a: 60]; [Lancaster 1981: 121-124]、他にも事例には事欠かない。
- (11) サウード家には、アナザ族をはじめとした、バヌー・ハニーファ族以外の部族の血が混ざっていることも確かである。だが父系系図を辿れば、マーニウを祖先とする一族は、バヌー・ハニーファ族が先祖であり、マーニウを祖先とするサウード家が現在サウード家の大部分である[المجلاني 1993: 67-79].

(12) ディルイーヤ陥落までの攻防については、例えば以下を参照。[フィルビー 1997: 203-239].

(13)ダヒールは、18世紀のナジュドのウラマーの数について[البسام 1974]が 17 名を記述していないと指摘した [Dakhil 1998: 53] 。

(14) [البسام 1974: 201]; [Juhany 2002: 129]; [Freih 1990: 316].

(15) [البسام 1974: 199-203].

(16) [البسام 1974: 193, 200].

(17) [البسام 1974: 193-194, 310].

(18) [البسام 1974: 194, 310, 788-790].

(19) [البسام 1974: 173-4, 789].

(20) [البسام 1974: 408, 620-622, 789].

(21) [البسام 1974: 167-169, 789].

(22) [البسام 1974: 384, 789].

(23) [البسام 1974: 138].

(24) [البسام 1974: 789].

(25) [البسام 1974: 184, 789].

(26) [البسام 1974: 789].

(27) [البسام 1974: 408, 789].

(28) [البسام 1974: 385, 621].

(29) [البسام 1974: 621].

(30) [البسام 1974: 621, 943].

(31) [البسام 1974: 621, 195-197].

(32) [البسام 1974: 621, 797-8]. [Juhany 2002: 130]は、アフマド・マンクールと誤記。

(33) [البسام 1974: 621].

(34) [البسام 1974: 168, 194, 309-313].

- (35) [البسام 1974: 312, 669-670].
- (36) [البسام 1974: 312].
- (37) [البسام 1974: 312, 956-957]. 没年は、ヒジュラ暦 1134 年末。
- (38) [البسام 1974: 312, 167-169]. 没年は、ヒジュラ暦 1124 年。
- (39) [البسام 1974: 110-111, 670].
- (40) [البسام 1974: 383, 670].
- (41) [البسام 1974: 302-306, 670].
- (42) [البسام 1974: 670].
- (43) [البسام 1974: 169, 793].
- (44) [البسام 1974: 168, 217].
- (45) [البسام 1974: 168, 797-798]; [البسام 1974: 621]によると、ムハンマド・ビン・ラビーア・ウースジーは、アブドッラー・ビン・ザフラーンに師事したという。
- (46) [البسام 1974: 168].
- (47) [البسام 1974: 168, 761-763].
- (48) [البسام 1974: 169, 180-181].
- (49) [البسام 1974: 169].
- (50) [البسام 1974: 169, 871]. 没年は、ヒジュラ暦 1124 年。
- (51) [البسام 1974: 168, 246, 364, 517-522, 771].
- (52) [البسام 1974: 169]. [Juhany 2002: 131]は、アフマド・フサイニーと誤記。
- (53) [البسام 1974: 364-365, 519].
- (54) フマイダーン・ビン・トゥルキーの兄弟である。[البسام 1974: 246, 520].
- (55) [البسام 1974: 246-8, 520].
- (56) [البسام 1974: 520, 771-3]. 没年は、ヒジュラ暦 1165～75 年と記されている。
- (57) [البسام 1974: 299-301, 520].
- (58) [البسام 1974: 520, 908]. 没年は、ヒジュラ暦「12 世紀末」と記されている。
- (59) [البسام 1974: 507, 520].

参考文献

- آل الفليح، عبد المحسن بن محمد. 1997/8. رغبة: مثال القرية النجدية. الرياض: مطابع الدلتا.
- البسام، عبد الله بن عبد الرحمن بن صالح. 1974. علماء نجد خلال ستة القرون. مكة: مكتبة و مطبعة النهضة الحديثة.
- بن عيسى، إبراهيم بن صالح. 1966. تاريخ بعض الحوادث الواقعية في نجد و وفيات دار اليمامة للبحث و الترجمة.
- الjasر، حمد. 1980. قبائل مملكة العربية السعودية. الرياض: دار اليمامة. 2م.
- الjasر، حمد. 1988. أنساب الأسر المتحضرة في نجد. الرياض: دار اليمامة. 2م.
- الجزالين، عبد الله بن عبد العزيز آل مفلح. 1992. تاريخ الأفلاج و حضارتها. الرياض: مطابع سفير.
- حريه، فائز بن موسى البدراني. 1994. من أخبار قبائل في نجد: خلال الفترة من 1445-1785 م. 1. الرياض: دار البدراني للنشر و التوزيع.
- الحقيل، حمد بن إبراهيم بن عبد الله. 1994. كنز الأنساب و مجمعة الآداب. الرياض: مطابع الجاسر. 5.
- الحنبلي، عثمان بن عبد الله بن بشر النجدي. 1982. عنوان المجد في تاريخ نجد. الرياض: دار الملك عبد العزيز. 2م.
- الريزي، محمد بن صالح العبد الله. 1986. بريرة: نموها الحضري و علاقاتها الإقليمية. ج2. الرياض: دار الكتاب السعودي.
- السويداء، عبد الرحمن بن زيد. 1993. 1000 سنة غامدة من تاريخ نجد م. 1. الرياض: دار السويداء للنشر و التوزيع.
- شامية، جبران. 1989. آل سعود: ماضيها و مستقبلها. لندن: صارك الطباعة و النشر.
- الطنطاوي، علي. 1961. محمد بن عبد الوهاب. دمشق: دار الفكر.
- الطيب، محمد سليمان. 1997. القبائل العربية: بحوث ميدانية و تاريخية. نصر: دار الفكر العربي. 5م.
- عبد، أسعد سليمان. 1995. معجم الأسماء الجغرافية. الرياض: مكتبة المدني.
- العجلاني، منير. 1993. تاريخ البلاد العربية السعودية. ج1. دولة السعودية الأولى م. 1. الرياض: دار الشبل.
- الغامدي، سعيد صالح. 1990. بناء القبائل و تحضر في مملكة العربية السعودية. الإسكندرية: جامعة

الإسكندرية.

الوحي، عبد الكريم بن عبد الله المنيف. 1989. بنو خالد و علاقاتها بنجد 1080-1208هـ (1669-1794م). الرياض: دار تقيف للنشر و التأليف.

Altorki, Saraya and Cole, D. 1989. *Arabian Oasis City: the Transformation of 'Unayzah*. Austin: University of Texas Press.

ブランド、レディ・アン. 1998. 田隅恒生訳『遍歴のアラビア：ベドウィン揺籃の地を訪ねて』法政大学出版社.

Burckhardt, John Lewis. 1992. *The Bedouins and Wahhabys*. London: Garnet Publishing Co. 2 vols.

コウル, D.P. 1975. 『遊牧の民』片倉もとか訳, 社会思想社.

Coleman, Ronald. 1976. *Revolt in Arabia 1916-1919: Conflict and Coalition in a Tribal Political System*. Ph.D. dissertation. Columbia University.

Dakhil, Khalid S. al-. 1998. *Social Origins of the Wahhabi Movement*. Ph.D. dissertation. University of California.

Dickson, H. R. P. 1936. *The Arab of the Desert*. London: George Allen and Unwin.

Freih, Mohamed A. al-. 1990. *The Historical Background of the Emergence of Muhammad Ibn 'Abd al-Wahhāb and His Movement*. Ph.D. dissertation. University of California.

Haddad, Mohammad S al-. 1981. *The Effects of Detribalization and Sedentarization on the Socio-Economic Structure of the Tribes of the Arabian Peninsula: Ajman Tribe as a Case Study*. PhD Dissertation. University of Kansas.

Juhany, Uwaidah M. al-. 2002. *Najd before the Salafi Reform Movement: Social, Political, and Religious Conditions during the Three Centuries Preceding the*

- Rise of the Saudi State*. Reading: Ithaca.
- Juhany, Uwaidah Metaireek al-. 1983. *The History of Najd prior to the Wahhabis: a Study of Social, Political and Religious Conditions in Najd during Three Centuries Preceding the Wahhabi Reform Movement*. Ph.D. dissertation. University of Washington.
- Lancaster, William. 1981. *The Rwala Bedouin Today*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 片倉もところ. 1986. 「族認識からみた家族」板垣雄三編『講座イスラム4・価値と象徴』講談社.
- Musil, Alois. 1928a. *Northern Negd*. New York: American Geographical Society.
- Musil, Alois. 1928b. *The Manners and Customs of the Rwala Bedouins*. New York: American Geographical Society.
- 中田考. 2002. 「ムハンマド・イブン・アブドゥルワッハブ」大塚和夫他編『イスラーム辞典』岩波書店, p.984.
- 中村覚. 2008. 「サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤: 都市民と遊牧民の政治的役割に関する先行研究」『近代』100:1-42.
- 中村覚. 2009. 「サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤: 方法論的検討」『近代』101:89-127.
- Nuaim, Mishary, Abdalrahman al-. 1987. *State Building in a Non-Capitalist Social Formation: the Dialectics of Two Modes of Production and the Role of the Merchant Class, Saudi Arabia, 1902-1932*. Ph.D. dissertation. University of California.
- Oleander Press. 1986 (1917). *Arabian Personalities of the Early Twenties Century*. Cambridge.
- Philby, H. St. John B. 1922. *Heart of Arabia*. London: Constable and

Company Ltd. 2 vols.

Vidal, F.S. 1976. "Mutayr: a Tribe of Saudi Arabian Pastoral Nomads."

D. E. Hunter & P. Whitten eds. *The Study of Anthropology*. New York: Harper & Row, pp.486-505.

Wallin, G.A. 1979. *Travels in Arabia 1845- 1848*. Cambridge: The Oleander Press.

Zarins, J. & Ibrahim, M. & Potts, D. & Edens, C. 1979. "Comprehensive Archaeological Survey Program: Preliminary Report on the Survey of the Central Province 1978." *Atal*. Vol.3. pp.9-42.

付記

本稿は、博士論文『サウディアラビア王国の国家形成と支配基盤：都市民と遊牧部族民の政治的役割の分析にむけて』（2002年東北大学国際文化研究科受理）の第3章を再構成・加筆修正したものである。

（なかむら・さとる 神戸大学大学院国際文化学研究科・准教授
中東地域研究・国際政治学）